



江戸名所図會

十八

JL 4
3605
18



江戸名所圖會卷之七

搖光之部目錄

大 属賀岡八幡宮

洲
海
無
天

海福寺
元誓
石地蔵

六間堀神明宮

圓向院
猿江泉養寺蓮

三市堂
振源所
花田社
天王殿
同山堂
碩官村社

永代親世表

田隅はさ
生山岡の
境

砂村元八幅文

採茶庵舊蹟
一螺寺

同居之地
 弘勒寺
 弘勒寺

日
先
社
蓮
堂
阿

漢堂
門
迎林祠

東戸邑道經神家

永代
遊宴の事

源川本場村本屋

淨心寺
七面堂

靈雲院 延壽禪師
源八幡宮 旅所

六百羅漢寺
 此寺くわんわん
 東雲寺文天洞
 同休東の家
 佛

飛戸天満宮
二月廿四日湯島

卜新梅

之十之間堂

陽嶽の英に
之を
墓

靈巖寺
光院

芭蕉庵舊址
一之橋辨

漢堂肉相之

普門院

入神明文

志賀文庫

昭和十九年四月五日
故三上茂重三子代
三上茂重三子代

東覚寺 社務所

香取太神宮

寶蓮寺

常光寺

東覚寺 社務所

陸奥太子堂

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

蒙古退治日丸

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

靈山寺

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

業平天神社

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

遠州秋吉山崎寺

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

妙源寺

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

大川橋の圖

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

長命寺

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

白鷺神社

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

隅田の宿

秋吉庵中の宮

古橋権現社

押上最敬寺

勝馬田くまのり池いけ 熊神宮くまのみや

あらひえ
洗

あすをゆくし
阿波の神

石茅

神代卷
神代卷

慈雲寺

紅橋

意寓日耕
耕云

九月廿日祭禮圖

萬世

新刊

燒殿

九月廿日祭禮圖

萬世

新刊

燒殿

九月廿日祭禮圖

萬世





富岡八幡宮

深川永代嶋より別當の真言宗にて大栄山金剛

神院永代寺と號す

江戸名不記ニ寛永五年の夏弘法大師の靈あるより
高野山の西門主碩學其外東國一沱の衲僧此永代鳴を集會

一夏九旬の間法あり列又弘法大師の御影堂を建て真言三密の秘蹟を講じそれより以後
神前又醜健のあつるありと云云

本社 祭神 應神天皇 神皇正統記 相殿 右 八幡大明神 三座

の
の
ら
ら
て
け

相傳往古源三位賴政當社八幡宮の神像を尊信之其後千葉家

及ひ是利將軍尊氏公方基氏又官領上松等の裔くは侍

太田道灌ちやうどいふんの墓むらの道灌没すののくんとく後と神傷くんとくの所在しやうざい中定ちやうじやう今尚けふたう社やしろあり

東の方砂村の海濱又元八幡宮と
衣此れ又當社を創建せとの
十二町より

稱する宮居あり尚社の旧地といふ
 華構の坊より唯茅茨の堂をあらと
 然る小大和國生駒山

の角基寶山師正保三年丙戌永代寺周光阿闍梨の法茅とあり寛文

四年の頃こころ靈夢れいむを感かん一宮社きやうやを經營けいえいと目あゝと一落うたふ成なり一結むす梅

備そまつるあつあつとくま
双降ふたふり神光しんこう日々ひひ新あらたうき
河東かとう第一だいいちの宮居みやゐ

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

る進り當社の額より懽寧と書いたる青蓮院宮尊禮法親王の

眞蹟まんとくの社内未だ多し休やすみへ長々ながながと
當社四隅奠もとい字じ又隅至子宮またすみこにきう
いふところ又隅至子宮またすみこにきう
荒神宮あらかみみやう入舩所の道の傍はたけ

神偶 かみぐり
 摩利支天宮 まりしちんぐう
 永代寺門前 えいだいじもんぜん
 乾隅 いぬぐみ
 大勝金剛宮 たいしょうきんぐう
 日野 ひの
 赤白町 あかしろまち

園女そのめ 櫻さくら 永代寺えいだいじ 林泉りんせん のうちよあり 西徳年さいとくねん 間ま 金女かねめ とのひそ 俳諧はいかい を好あ める 婦ひと 女め されを植うゑ たん

二 華表 このとらね 熱門の第一あり石をりて製を左右の柱に銘文を刻を此文の鳴嶋氏撰する所なりと書之 赤井導より其文をのちり

富賀岡八幡神社祠石華表銘
並序
維著雍敦牂之歲都下人某某等拾柒名戮力率錢

建富岡八幡祠
青石華表凡
厥高壹丈伍尺
右中

間稱焉石以代木備不朽也
左

肥山

鳳卿蓋以此文舉之也鳳卿所聞之國家旁及自禱云廼具狀來
鳳卿以此文舉之也鳳卿所聞之國家旁及自禱云廼具狀來

由中而外
載上之心
人神之所
以繫之歟
名以繫之
可與風因
叙厥載勒
右柱觀

繫昔應神帝惠協天發跡于豐男山之遷

威靈顯赫
奕世且千
邀矣東海
齋祠壹公
惟石之柱
磐之祠前
懇祈鼓鑒
私禱相延

敦忠祗肅
神監昭然
幽官陟隲
福釐永年





其二

の四と今太嶺と字とる三三同堂の同此とてなりその地
 今八町と多れは俗同堂前と唱ふも三三同堂の前と云はれ略す
 田録の次に羅く灰燼なり其後今の地は福させられたりといふ
 三三同堂は数帳又慈眼大師の發起なりといふ又一説はひり
 流の武土をたてて江戸利根の遠く松本と歩みかをそとてなり
 崎辨財天社 同野東の方崎あり列當を吉祥院と号す本尊
 辨財天女の像は弘法大師の作といふ相傳元禄年間深津氏正隆

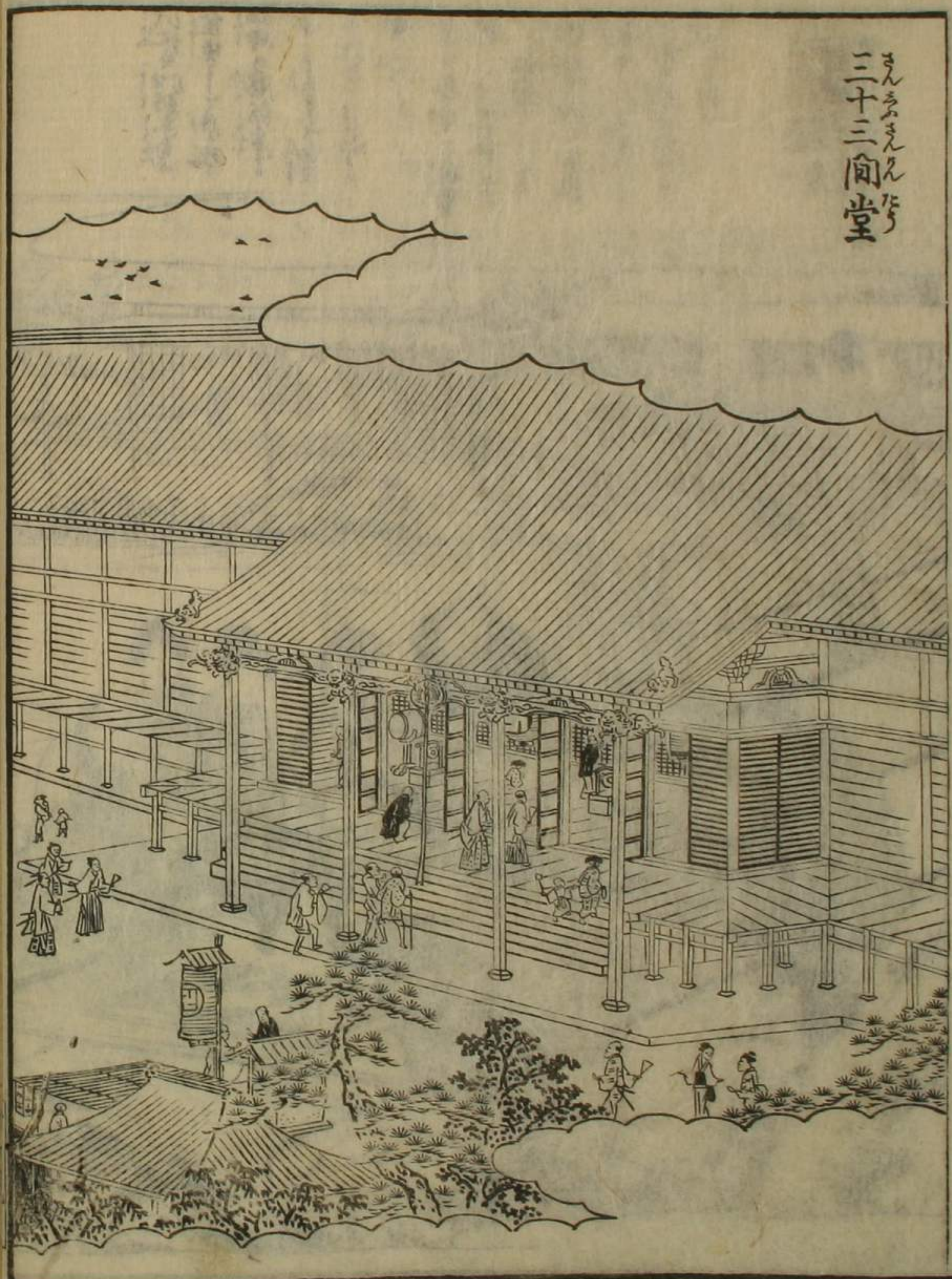
台命を奉へ八幡宮とて東の方の海濱を築きたり陸地とて依同
 十二年庚辰護持院の大僧正隆光
 此地は天女の宮居を建立とて
 名あり

此地の海岸より佳景あり殊更弥生の潮盡みの都下の貴銭袖を連
 る真砂の文蛤を搜り又の棲船を浮く妓婦の絵巻より其の催
 てもありる春色を添ふの一奇観たり又冬月千鳥おも名をとり
 長光山陽嶽寺 深川富岡橋の北結横小路あり妙心寺派の禪宗
 一々本尊観音大士の像は恵公僧都の作ありと云向井氏忠務用

二軒茶屋
 雪中遊宴之図
 此の茶屋は、
 佳境にて、月夜
 四時の静寂を
 中ふゝとて、雪
 の白さを、茶の
 緑人々、ふつと
 来りて、茶の香
 氣、一掃を、雪
 の白さを、茶の
 香氣、一掃を、雪
 の白さを、茶の
 香氣、一掃を、雪

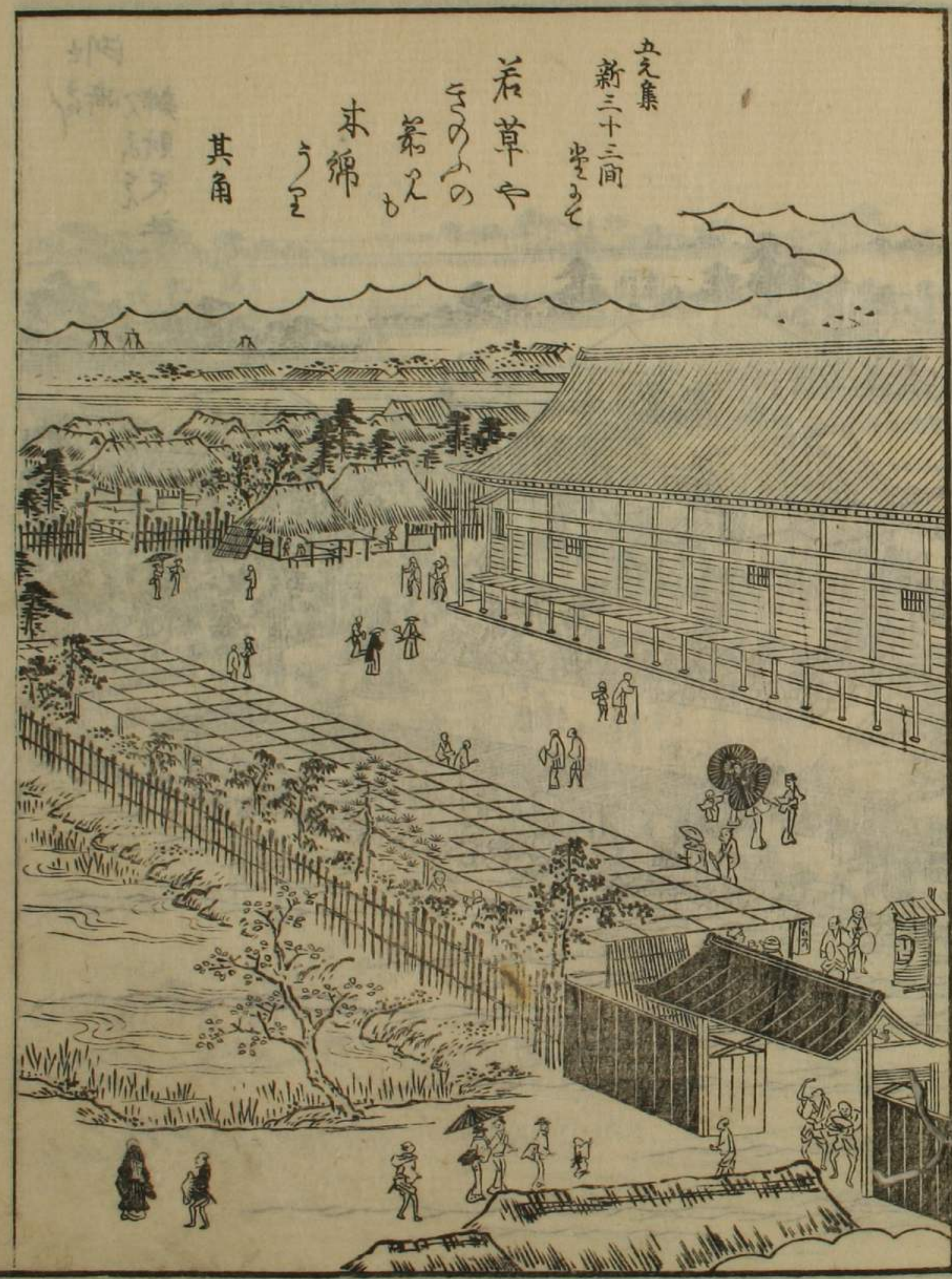


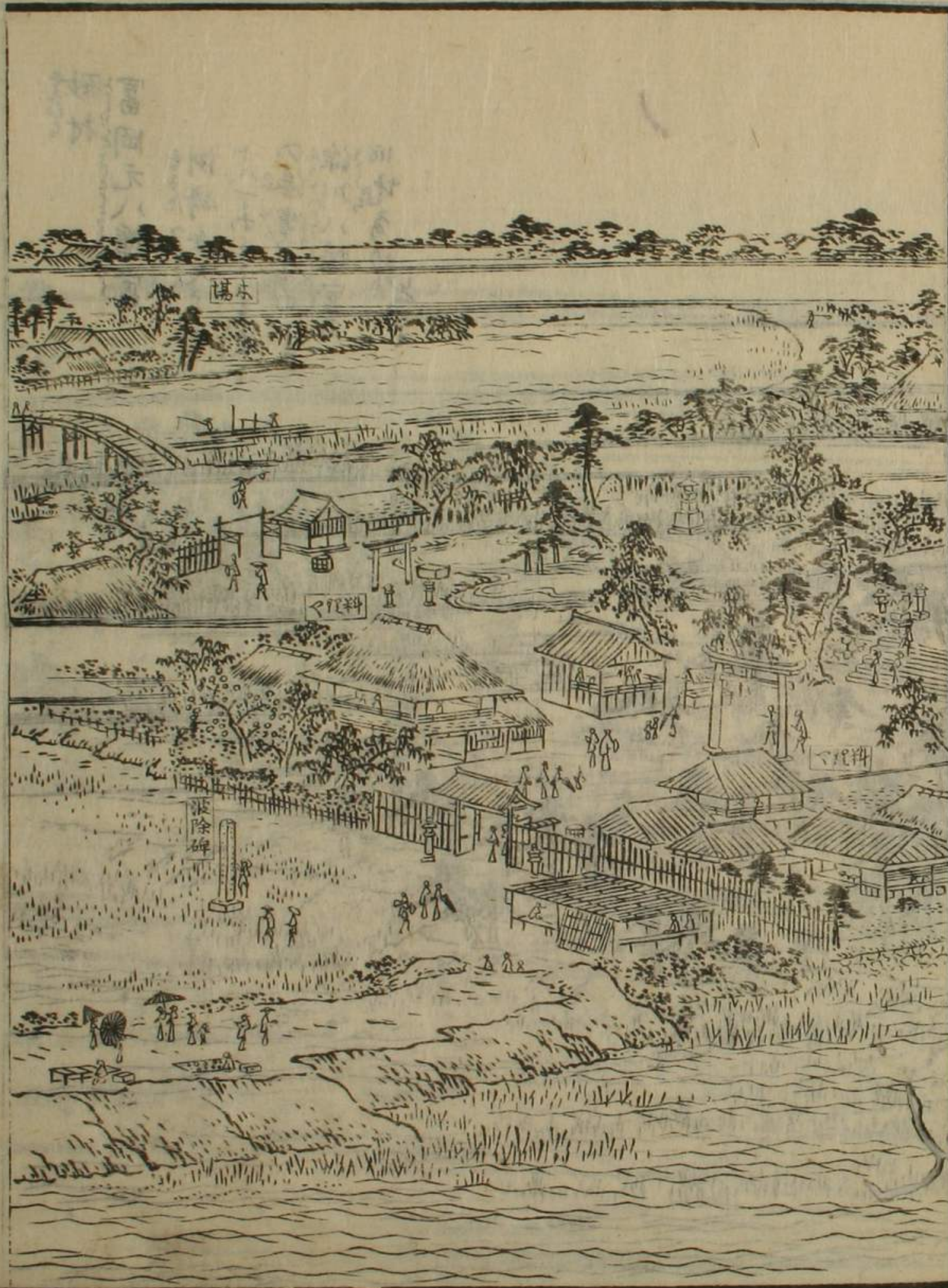
まんままん
三十二間堂



丸え集
新三十二間
堂

若草や
さのの
第ふも
本綿
うま
其角







此
多

砂村
富岡元八幡宮
例崎弁天
十八丁あまうま東
の海濱
源川八幡宮の
旧地

此
多



[illegible]

深川
さく
木場

墓の精舎より文室和尚を宛山とて陽嶽の向井和尚の相列三崎見

桃寺白室和尚の法弟より見桃寺も鎮主向井氏

出山釋迦如來像立像三尺よりあり極く妙作なり坪内大隅四條といふ人為寺文室

二代目英一蝶墳墓當寺卯塔の中より碑面は概外道輪信士元文二年丁巳閏十月十二日

永壽山海福寺同所寺町通り中視の右側よりあり黃檗派の禪林あり

江戸鰐頭二箇寺の一負なり萬治元年戊戌の創建同山に隠元禪師

中興を獨本和尚より本尊釋迦如來左右に迦葉阿難十六阿羅漢木

の像を安と岡山隠元禪師の肖像あり

佛殿 額に二重

掲る宛山隠元禪師の筆あり

聯 掲る宛の額より

對別和尚の筆

大 旌 旌

有る額筆

燈 燈

有る額筆

妙 妙

門弘忍子秋後海云其

天王殿 國帝の

金堂中真法靈振乾於千秋

祥利中真法靈振乾於千秋

天王殿 國帝の

天王殿 國帝の

聯 左の

大鵬の筆

法國衣氏風高名而潤明

降魔捕正法遂久以安

鐘樓 天王

鐘樓 天王

鐘

鐘

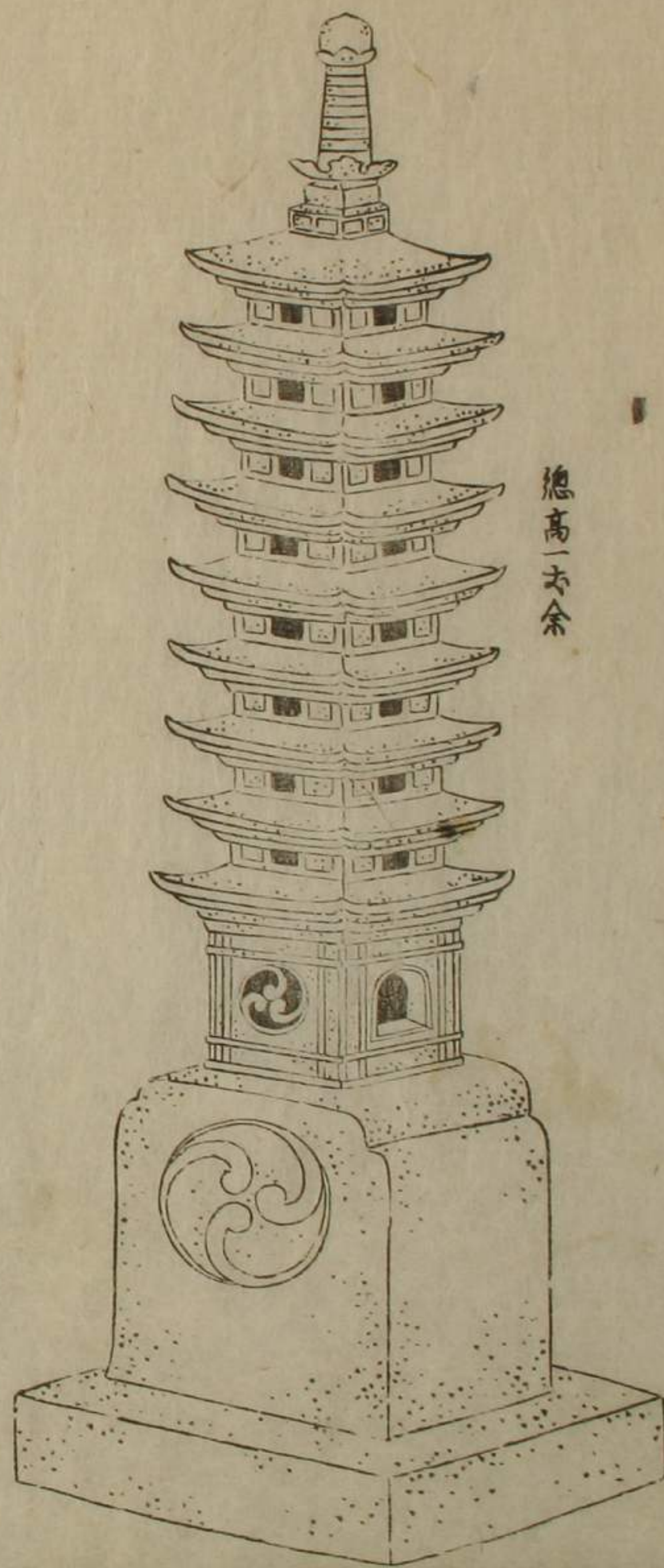
其文たのこ

當山洪鐘者寛文壬午年石川政勝个住居士捐之
爲大福田因請銘乎壬午年開山隱老和尚永令垂不朽
也時天和二氏思先亡之冬初火起然金燦燦殿宇巨焉
等者同氏思先亡之冬初火起然金燦燦殿宇巨焉
及乎竣工知事來乞銘遂再舉此以鑄其銘曰
大化燭内一火鑄成遂再舉此以鑄其銘曰
洪音嘹唳醒覺群生禪林而寂有扣則鳴
返聞自性寂寂惺惺覺壽源綿行福海澄清
化風永扇一翁隱元琦謹題
天 右 山 八 十 一 翁 隱 元 琦 謹 題
永 壽 山 海 福 禪 寺 住 持 沙 門 獨 本 源 和 南 謹 識
檀 主 石 川 氏 正 茂
治 工 武 列 江 戶 居 住 中 村 喜 兵 衛 藤 原 正 次

九層塔

寺境池のわきよりあり高一丈五尺の塔あり相傳ふ武田信玄の
のありと傳ふ上屋氏某これを持付たり高きより建ると傳ふ

總高一丈余



採茶庵舊蹟 同所平野町あり能請師秋風子の庵室あり秋風本國の
 参列あり秋山氏より鯉屋と喝へ大江戸の小田原町に住て奥書たり
 後隱栖し一元と号と 裏翁裏村 常は俳諧を好み檀林風を慕ひ
 のち芭蕉翁秋師とて此建遊ふ夏凡六十年翁常は奥書たりと
 云く去来ハ西三十三箇國秋風ハ東三十三箇國の俳諧奉行あり

とわくふく道の邊ありあり秋風一は芭蕉翁の号あり後俳主自稱ゆゆしく其四地ハ
 と秋の芭蕉翁の号あり詳あり享保十七年壬子六月十二日八十六歳とて没せり西暦秋翁の中後翁と
 塔と

秋風白集

予爾居採茶庵をれり秋風は

秋翁をてりうとて秋翁の風あり

云々のたまりたるあり

向家もちほしとぬ花乃ち後そり南

このめくれのひと

秋風

時雨

深川の月も時雨ふあうり南

深川よりうれ

川の音寂の起野とてとて

法苑山浄心寺

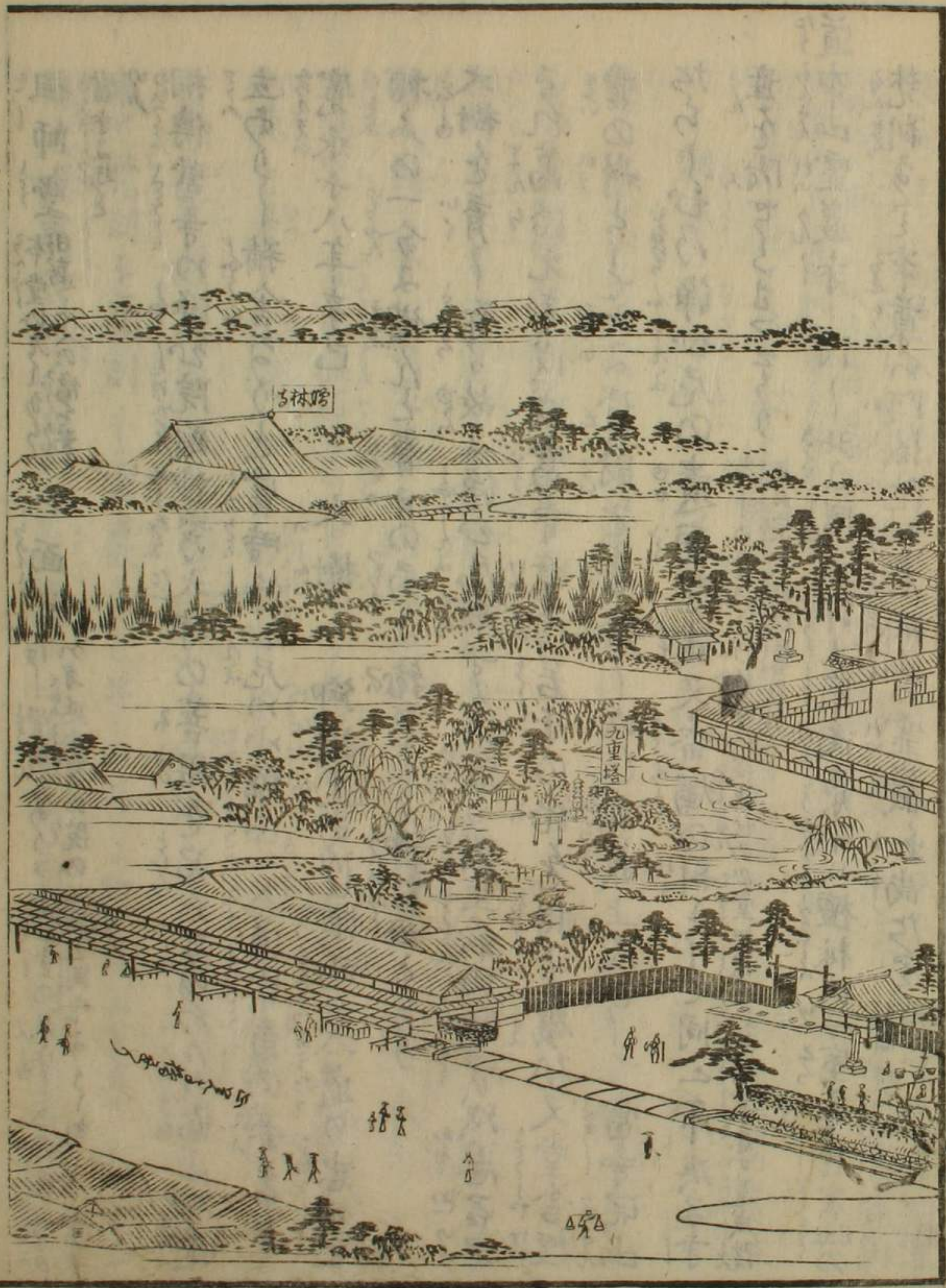
同一通り正覺寺橋より北の方右側あり日蓮宗甲斐文

國才延山は屬を乃身延山の弘通所と称せり萬治元年戌戌創建の

寺院あり用山の通遠院日義上人と号と中興ハ覺成院日念上人

乃至本尊は釋迦如來の像を安と

ありて當寺よりてまるとり



海福寺
 武田信玄の
 持てゐた
 雲石の海
 堂基
 堂前池の
 傍に
 のこる

祖師堂 本堂の左にあり 七面堂 本堂の右にあり 相傳當寺の淨公院殿妙秀大師の菩提を弔ひせあり

相傳當寺の淨公院殿妙秀大師の菩提を弔ひせあり

立あり一精舎ありと當時淨公尼の小堀正一入道宗甫の妾あり

寛永十八年辛巳 大樹 御誕生あり頃正一入道の忠公を

補ふの一分は備んと春日の局は執事 御乳母とあり

大樹を育ちし故に淨公尼卒するの後も猶生前の勤勞を思召出

され萬治元年戌戌當寺境内若干の地を封じ賜ひ又堂舎經

營の料として大に買財を喜捨しあひ日義上人をして當寺尼山

たらしむ乃淨公尼の遺廟を建又香燭の料として同三年庚子寺

産を附せしむるなり 殿日宗大師の墓あり

道奉山靈巖寺 日一北は隣る淨土宗園東十八檀林の一室として宏壯の

梵刹ありと奉尊の阿弥陀如来用山靈巖和尚たす

傳は姓ハ里見氏南條小糸の産あり十三日縣青龍寺の秀岩師の室に入利條と其姓明敏

天狗の佐賀の人或は後列府中の老姓ハ今川氏流津津運院尼の

法嗣ありと云尚廟創の精舎松園寺あり收葬しと云あらは依是を略せ

寺産を附せしむる 寮舎僧坊堂を連ねて巍然たる正え坊り造立

せし銅像の地をその大江戸六地所の一負あり 總門の内正面は

對し毎歲四月朔日より同十日まで阿弥陀經千部讀誦修行あり

由は道俗群請せし

相傳寛永年間當寺開山靈巖和尚或曰大江戸の東諸を顧て侍

者謂て云く我大監を此地に建ひ侍者の云く江潮浪高く鉢

盂底空く一巨椀願ふを架せん師笑云く俟夫日わらん於是師

化疏を筆し諸檀家を勸勵し一簣毎二十念して願譜成結縁する

り故に四輩競應廣行日めらとて陸地とある 今靈巖和尚其地早く

成て梵刹を用創し靈巖寺と号せしとて於て學資五十石をある

爾法幢盛に起て五百の義龍恒に蟠る然り河山和尚の世 尚寺第廿世

松蓮社大尊

明曆丁酉の回録に罹る悉灰燼とあるの後今の地に移

るころとつり其頃今の地も海濱うて輒寺院構営あり

り成阿碩和尚 河山和尚の才ありて 十方を勧進して地を築固め諸

堂成建立せしむるなり

當知山本誓寺 重願院と号と同通り向例あり浄土宗江戸四

箇寺の一負たす 京外知恩院 唐佛の阿弥陀如来を本尊とす

相傳此本尊の相別小田原の漁者 其名をときまう 魚網を沈く彼地の海中

小得て後靈示ふに當寺よ安しなりとつる尚寺往古小田原

ありて傳蓮社曜譽西岡和尚 西岡師北條殿 創建一藤枝氏岡基の

浄舎ありて文禄四年丁未 嚴命に依寺を大江戸に移す

此今の寺敷内 貞蓮社大譽上人文賀和尚中興の開祖とある

此谷門の辺あり 其後馬喰町の辺に地を賜ひて

水戸中納言頼房卿の所母堂英勝院殿當寺を後造りあり

馬喰町

わが寺は浄土宗の三使未詳の三使ありの傳説なり天和二年回録の後今の地よりつりてあり

東寺教寺と名を朝鮮人の後説に定めあり

此藏尊石像 尚寺境内にありて塔の中ありて人の印の石ありて言ひ傳のた

がたに於靈意 靈驗ありとて大に群集なりとあり今一字の香堂を建てこれをを女尊とす

一蝶寺 同所東の方海辺新田敷の内あり京師必寺沈の禪

宗蒼龍山宣雲寺と号と元禄七年甲戌創建の梵園あり卓禪

和尚閑山たり英一蝶翁曾當寺に寓居を其頃の遊とて佛殿僧房

等の屏障悉く翁の畫あり故に世俗一蝶寺と号す

日曜山法禪寺 同所南の小路あり浄土宗より京師知恩院に属す

本寺阿弥陀如来の像の佛二安阿弥の作あり

菩薩の像の雲中より羅列し常に行者を護念し湯へ下の群粧

を模擬す 興院と稱するものあり極楽上品上の群相なり

阿上人と号す 慶長七年九月 濃列惠那郡柏塚の住人俗性ハ伊賀氏

かゝる二郎五郎則俊と号す 伊賀左衛門佐則吉の 弘治元年乙卯柏塚

三男あり後伊賀より改む

一城を筑せ江田の城と号けりといふ居住と
筑せ江田の城と号けりといふ居住と
三年織田が家へ移る信長の

後山家として駿河に至り中嶋と云はる閑居をある多良庵

と号け雲碩と改めて浄業を修行しり多良庵
天正十八年關東

御打入の頃道德殊勝の寺ある成江戸より品川よりひと寺

境を賜ふ今品川より其後文禄二年癸巳道三河岸へ移され又柳屋へ

地を習せられたり後天和三年より今此地より

其間例の通りいふ今も正月三え日の間の間に鉦鼓を鳴らしと

龍徳山雲光院 光嚴教寺と号て同所西隣る浄土宗江戸四箇

寺の一あり本寺阿弥陀如来の像の京師東山獅子谷忍徴上人

の作といふ同山の還運社往参上人潮香和尚と号す観智圓師の法嗣
一黒谷の法嗣

本願阿茶局あり甲別武田家の臣飯田元後等の孫同久太衛門某の女より
後後別今川氏義元の士神尾孫玄高久家の室とある

同利親少輔局あり大將軍家泥近の侍女より元和六年庚午

女御 入内の時供奉の功より後一位叙せらる當寺創開の

初も黄金二枚をいひ堂材を下し湯の

と号せし柳家堤の南より頃為寺と光嚴寺と号す雲光院の法号
後一位尼松邊吉周榮太妙

天和二年田子の出あり依あり二年今の地より雲光院の三大子の

額あり 後水尾帝の勅を奉りて良慈法親皇筆を添られと

昔の草堂は揚る今い

五本松 同所小名本川通り大嶋あり或人云四名女本と答るりと古に江戸
の某よりあると云ふと書に江戸

小名本川より又此地は隅田川のあり 九鬼家の構の中より道路を越て水

面を渡り水の古松をいひ 昔此川筋より程の古松あり又此

川を隔て南岸の地は知恩院宮尊空法親皇御函樓の舊跡と

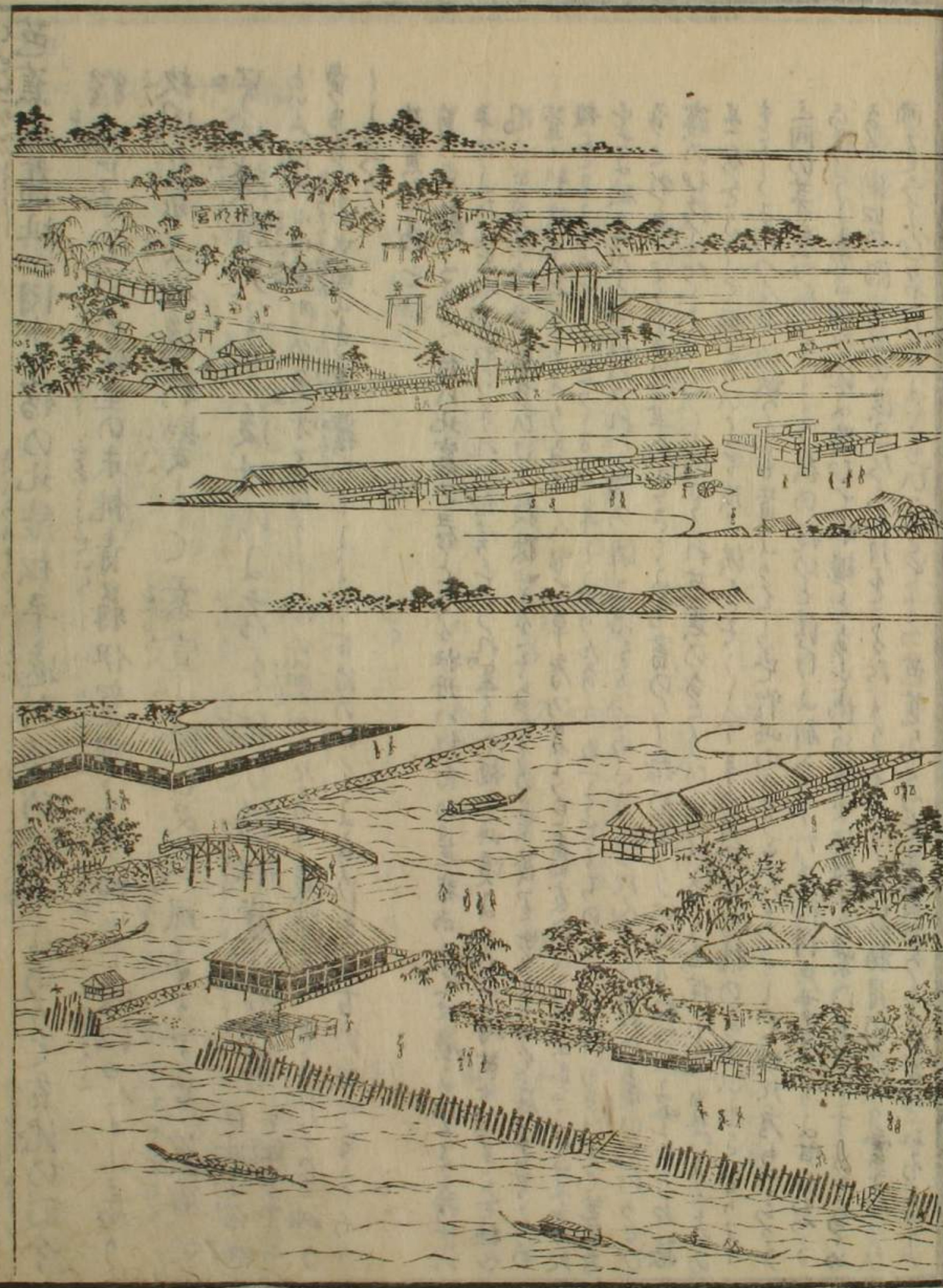
天王山雲光院 清澄所大川の傍万年橋の南詰より禪宗はこ

武別越生の龍穩寺より属し本尊の聖觀世音岡山六放光の東明

和尚と号く宝曆七年丁巳 台命あり依創建する所の蘭若

あり 岡基の年歴久しれりゆゑと

りて此俗俗川の新寺と稱ふ



深川
靈雲院



芭蕉庵

古池や

花

花

こむ

の

音

桃青



萬曆二十九年九月の十三日、ある舊式の糸紀ありて

是を歩射と號く相傳ふ昔此地開創の里正深川八郎右衛門某

宅地より伊勢兩皇太神宮を勧請するなり泉養寺の開山秀須法

印を奉祀せしむるなり此地の深川氏宅地の旧跡なりといひ

泉養寺記深川氏の起立の事其載其畧云く深川の地往古の廣くたる原野あり

其頃別所の名あり深川八郎右衛門某と稱する人ありて此地に居て

初に住人もあり荒廢の地ありて此地を名づけて深川と云ふなり

深川の文字を此地に唱へしむるといふ言 歳命ありしより深川の地を名づけて深川と云ふなり

香花院ありて今も深川氏累代の墳墓なり日野村新田の東に八郎右衛門某と稱する

同く此の泉養寺の地と重なる紅花の蓮あり花形牡丹と髣髴たり故に泉養寺の地を名づけて

萬徳山彌勒寺 日野二丁のまうりを隔て弥勒寺橋の北結ふなり真言新

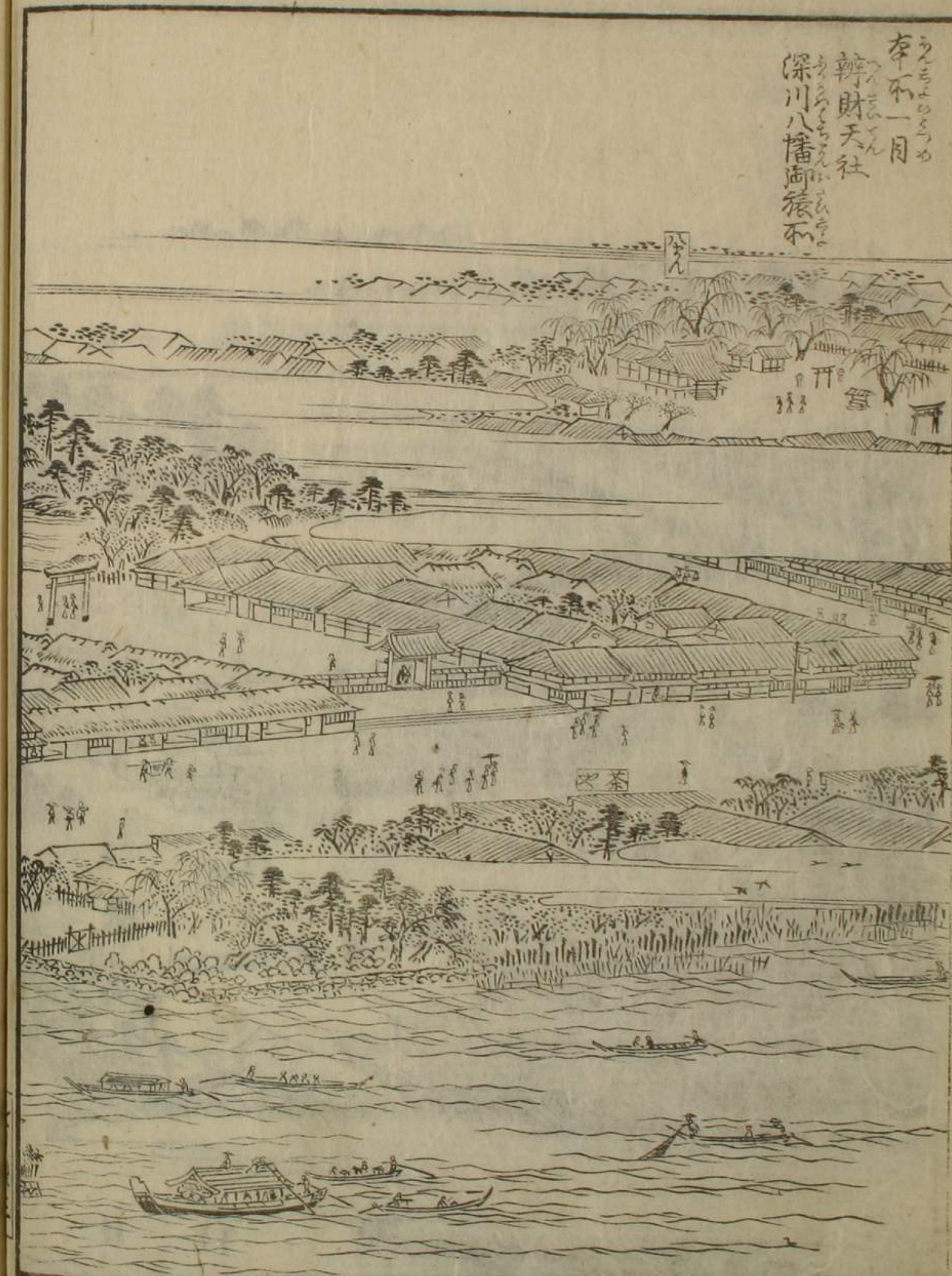
義の彌頭江戸四箇寺の一室あり本尊ハ藥師如來 傳記失たりとて其末

中興開山歟有鑑上人と号と總門の額ハ弥勒寺と書せり朝鮮

圓雪月堂の筆跡あり當寺旧柙原の地ありとて天和二年圓祿



本所
彌勒寺



本一
 轉財天社
 深川八幡御後不

の後此地へ移されたり毎月八日十二日を御目うくと奉請多し

深川八幡宮御祈所 大川端大船倉の前より富田賀岡八幡宮祭

禮の砌ハ神樂此地へ渡りせらるる

辨財天社 同所一の櫓の南の落より祭所相別に傳ふ同く元禄

の始惣換校叔山氏勸請と己巳の日奉請多し

志天に奉請とあるさうらうと欲し三七日の飲食を断て相別に傳ふより天女居る森松

至り其の森松を祈請せし果て靈應ありと云く竟に城樹の森をよりより森松の森

杉山流といふ慶安の頃 合傘を装ふ要當中に於て此の流と云ふ森松の森より森松の森

を揚る者者の總縁とあるさうらうと欲し三七日の飲食を断て相別に傳ふより天女居る森松

一流の親縁は有り毎年二月十六日五月十九日ハ替者室藏は集會して琵琶を彈く平曲を

奏し京師様塔舎より行ふあり

國豊山同向院 兩國橋の東結よりあり

称念上人の遺風ゆて捨世一流の佛域たり明暦二年丁酉の春大火

の時焼死の輩の冥魂追福のため毎歳七月七日大施餓鬼法會を

後行と又八日佛餉施への檀主現當兩益の法ゆり總門の額

は國豊山とあり縁山定月和尚の筆あり

本堂 本尊阿彌陀如来座像壹大許あり

洞の阿彌陀像は清くありある事四世觀音上人祐監和尚より今の本尊を造りて堂あり存す

不の洞像の清くありある事四世觀音上人祐監和尚より今の本尊を造りて堂あり存す

第三世觀音和尚今の 備中十體阿彌陀如来

地蔵とありたりといふ 命せられ其頃

思ふ事と一體ありといふ縁山三十三世の貫首遵言貴屋上人念持仏より明暦の大焼死

弱死せる石の十萬八千餘人の亡者を同向のへた旨

命せられ其頃 三佛堂

本堂の右あり假の佛堂を造當

なり焼死弱死の亡者佛脱の如きも佛たちを

堂に形死の者の幽靈追福のため方丈年間

佛堂ありてありありなる市街と行い佛餉を本尊の僧徒十六口常一の堂中より居る

一言觀音 佛の像ありありなる市街と行い佛餉を本尊の僧徒十六口常一の堂中より居る

辨財天祠

佛堂の本よりありありなる市街と行い佛餉を本尊の僧徒十六口常一の堂中より居る

馬頭觀世音

本堂の右あり假の佛堂を造當

圓光大師堂

本堂の右あり假の佛堂を造當

樟

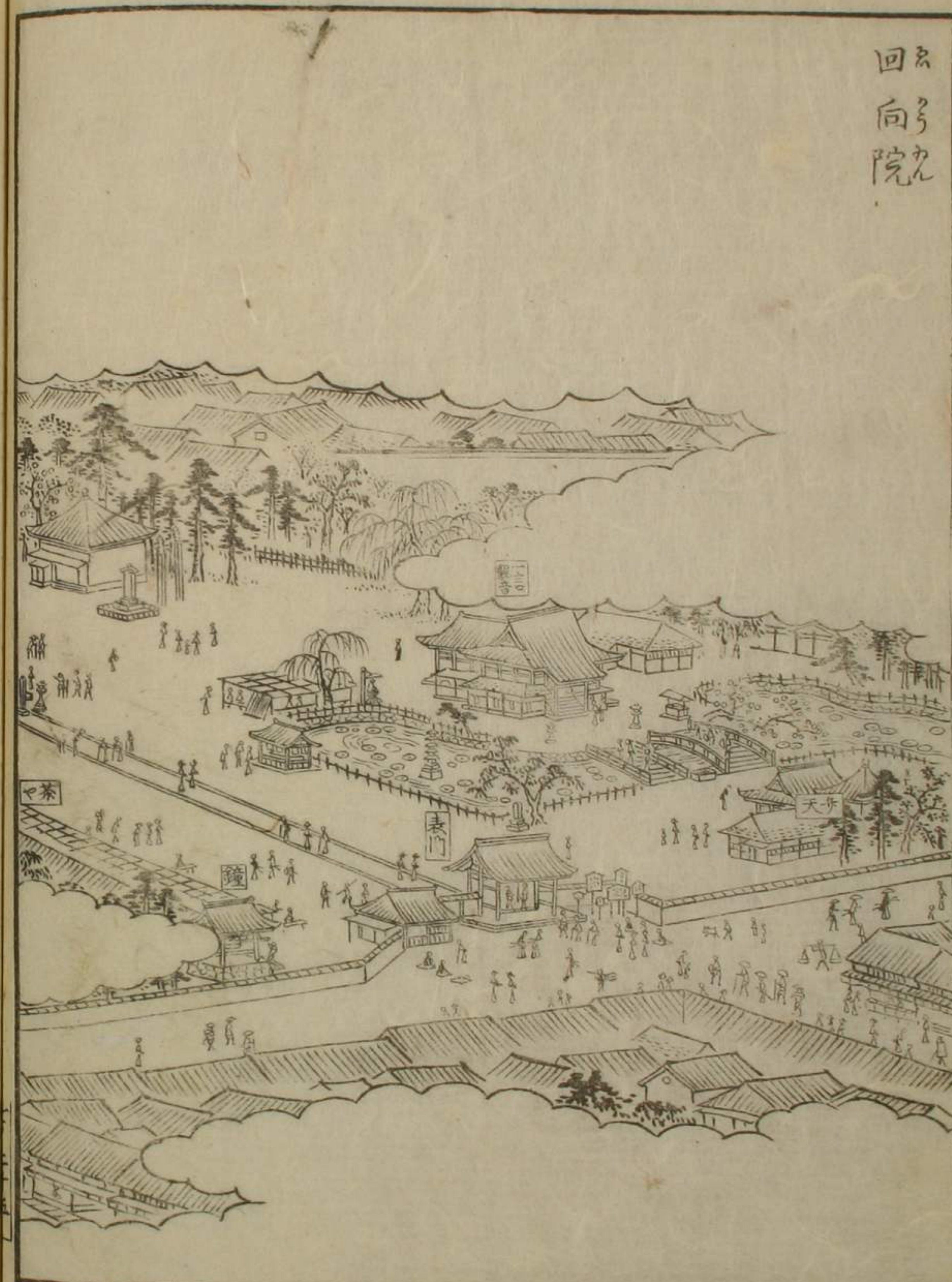
是も信譽上人手自撰られ

阿彌陀如来銅像

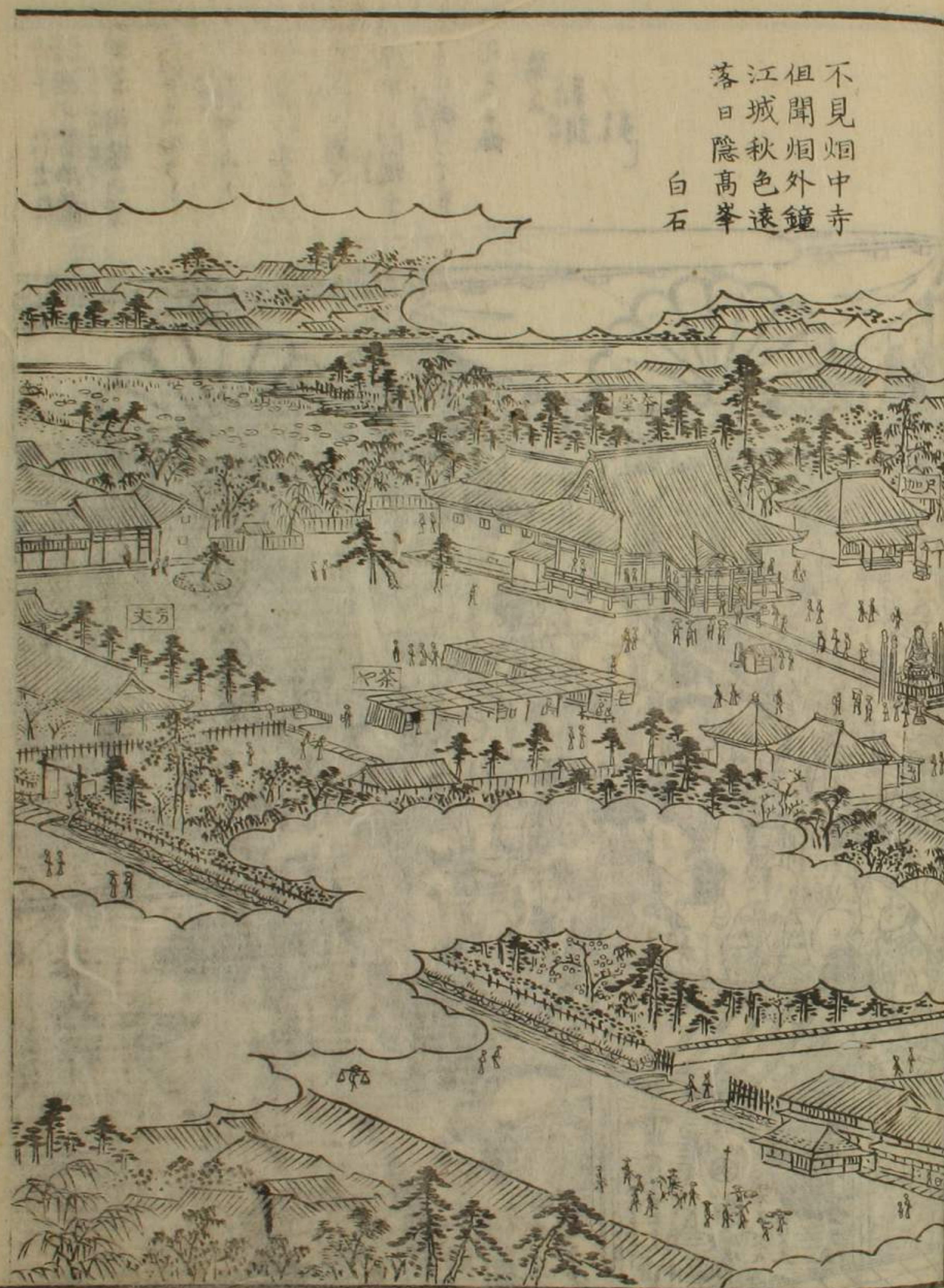
坐像一丈六尺あり

坐像一丈六尺あり

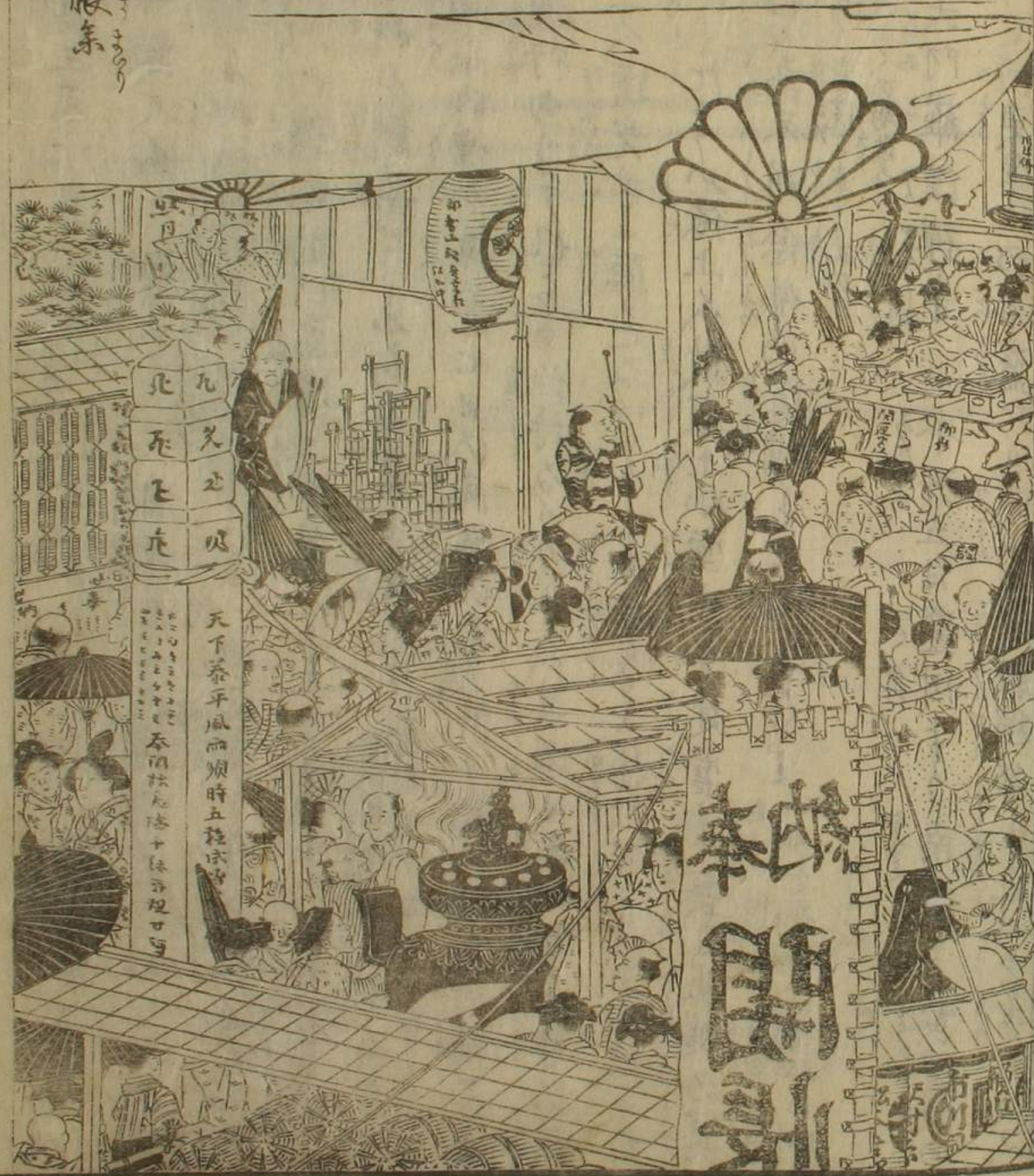
回
向
院



不
見
烟
中
鐘
寺
但
聞
烟
外
鐘
江
城
秋
色
遠
落
日
隱
高
峯
白
石



回向院開帳
 大に戸をひらく
 諸國の聖佛聖
 神等結縁の正
 敬る所の多し
 高院に於て
 修せしむ候方
 りり便りふき
 此のる故
 殊に
 未請
 多し



相傳明曆三年丁酉の春正月十八日大江戸大に仍る焼死する者凡
 十萬八千餘人あり時よ
 許歩の比よ件の焼死骸を埋藏しよ一堆の塚を築き號けて漏澤
 園と唱ふ乃亡魂追福の爲増上寺第二十三世貴屋大和尚歿し
 一字の梵刹を創基せしめらる當寺是なり
 諸宗の僧を集め一七日の間塚の布ふ於千部の經を讀誦せしめ
 大法會後行ありされとも住持ありし其頃小石川智香寺の信
 譽自心上人道光世は隱居ありし其當寺は移住せしめ第二世ありて
 岡山と稱したるの依上人彼塚上小堂宇を建營し長は幽魂の冥
 福を助むる爲不斷念佛の道場とせしまた
 天恩山五百大阿羅漢禪寺
 本所五目堅川より南あり黃檗派の
 禪林なり河東第一の名藍たり岡山の熾眼禪師中興の象先和尚又



縁に泉鏡寺の比は
 生ずるところの蓮花
 重瓣紅花うて花
 牡丹は髪髻たり故
 奇観とて寛政
 九年の晩夏
 今に
 新に
 あり

猿江

摩利支天祠

靈驗頗著
諸人常乞
未由拾遺
名不令



松雲禪師を以開基の大祖と稱す

佛殿本尊釋迦牟尼佛拈華像 長一丈六尺下巨石 脇士 文殊

普賢 各高八尺 阿難迦葉 各高九尺 左右の階壇小列する所の五百阿羅漢

の像ハ各等身よりて共小松雲禪師彫刻する処あり

額 本尊の
黄葉隠元を
人の筆あり

聯 同堂内
柱の筆あり

又ふめおる傳深光室無祇園毛地

額 同堂内
の正面
の筆あり

佛殿
の筆あり

また居者現深淵影影歸石橋燭雲

額 同堂内
の筆あり

嶺園 諸

額 佛殿
の筆あり

帷 明光

五百羅漢造立之末由

松雲禪師ハ京兆の人寛雄よりてとく正信を見と

或人云く松雲禪師始ハ

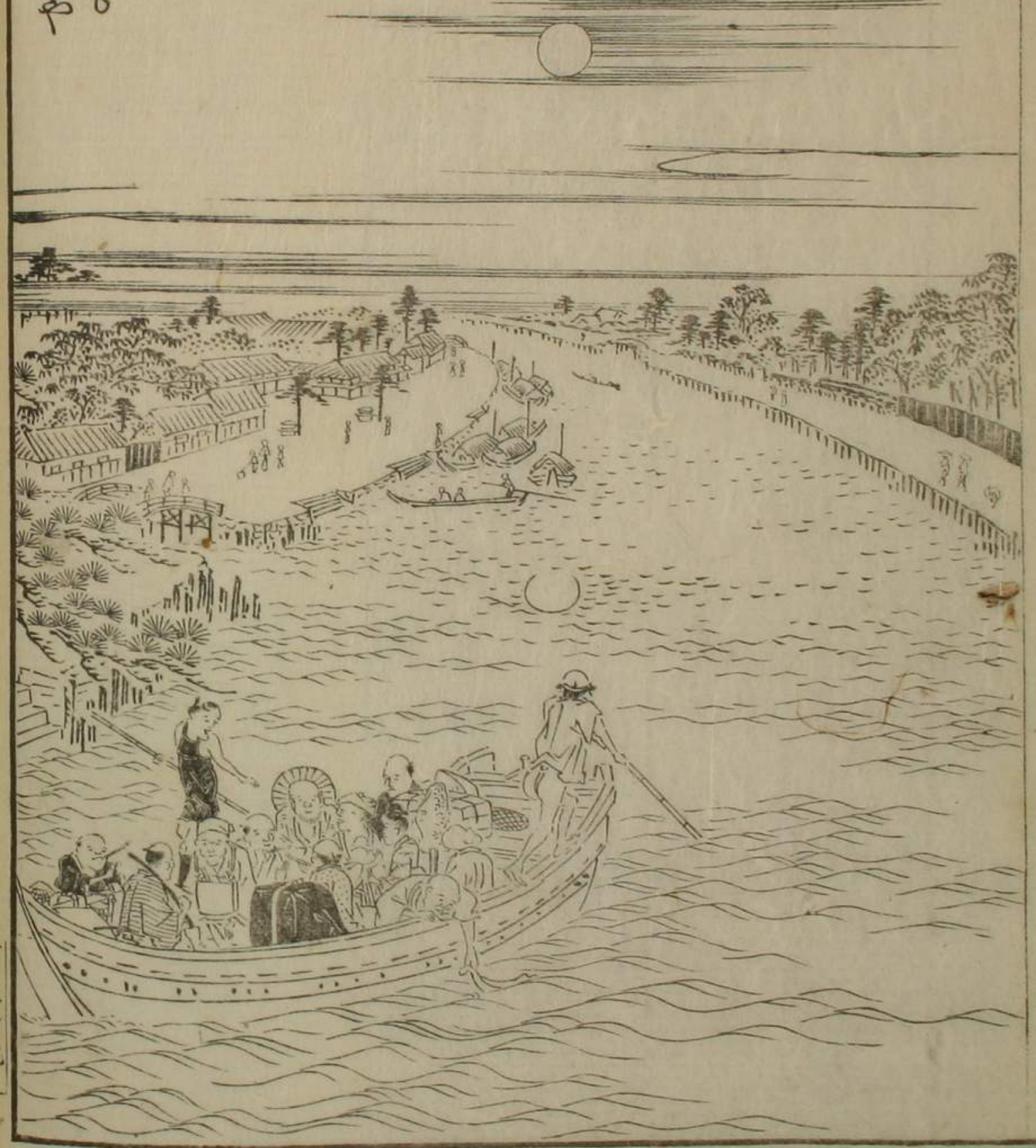
佛二の俗稱を寛文九年己酉 十二歳の瑞龍精舎小入て鐵眼禪師より

隨ハ雜髪して僧とある後游方の懷のより師の許を辭して

小名木川
五松

深川の末
五松との
舟を
こいで

川上を
のり
かこも
や



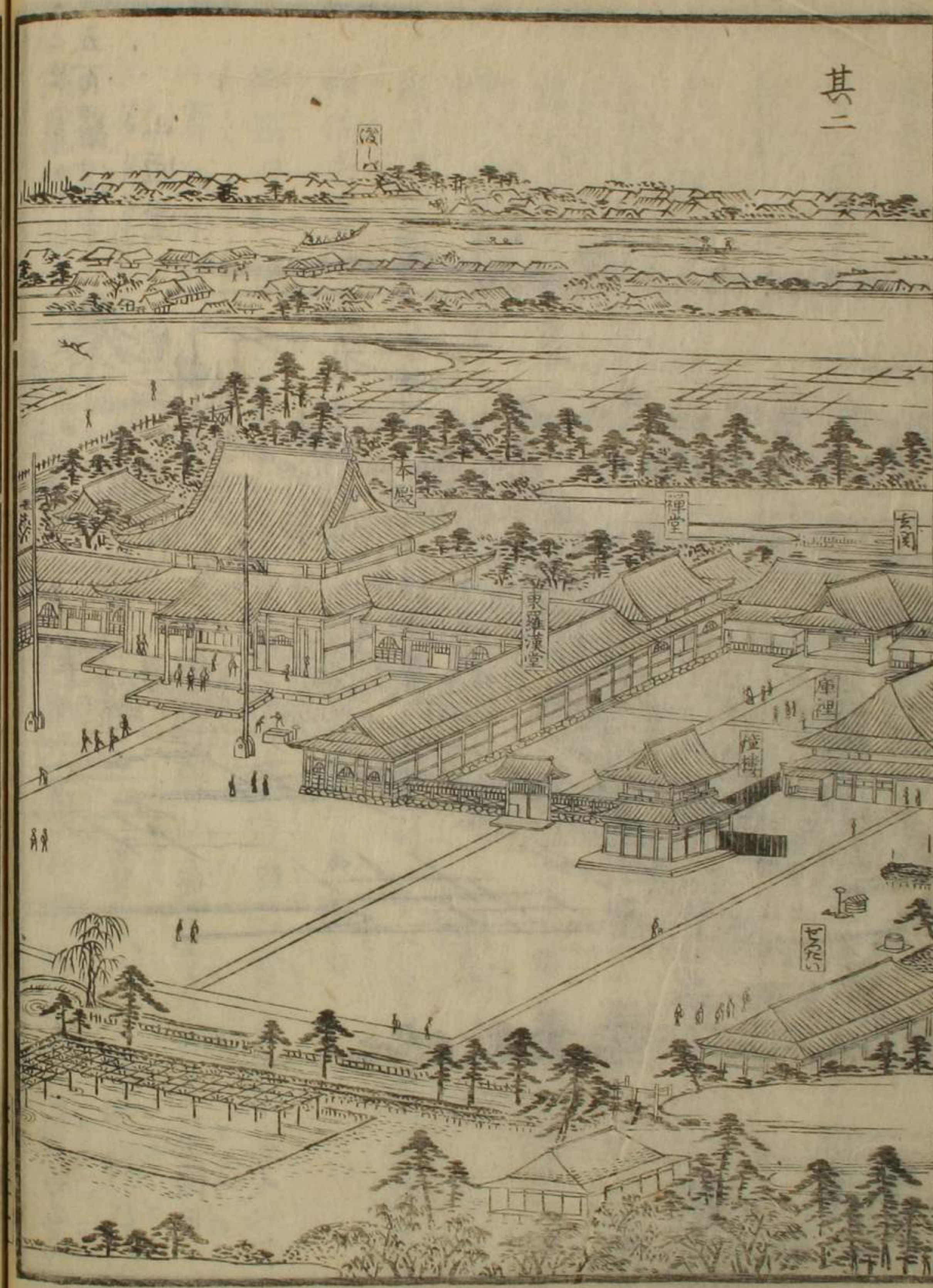
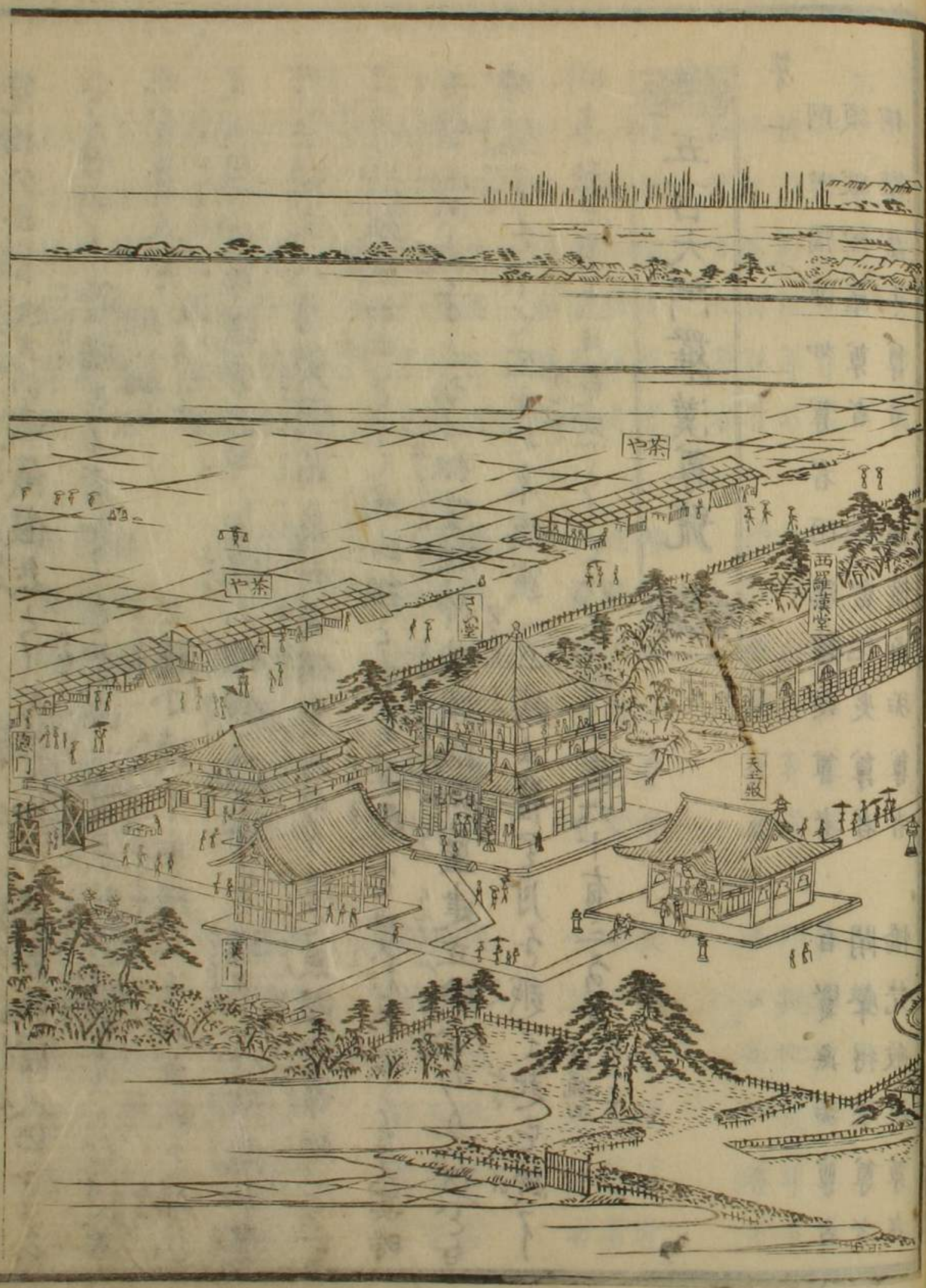
月の
夜
芭蕉



五百羅漢寺
三廂堂



海西小瓢歴一豊前國羅漢寺小至り唐土天台山の逆流並に賢
順といふ二僧一夜に造立せしといふ五百聖者の石像を瞻禮
恭敬日小厚く其後漸く五百羅漢の像を手彫せんとするの意
あり歸省の日鐵眼禪師果して其命あるを以て遂に貞享年間江戸
小末り元禄辛未始て浅草寺の境内壽松院に就て假屋を假け
衆人をとり羅漢の本像を彫刻を弘福寺の鐵牛和尚衣資を喜
捨一尊を刻みしむといふ時も至りて終るる微くこよ
歲月を歴たり然る小同壬申の年大倉前一十六頁の道俗結盟
輔佐を癸酉孟春より五十尊成甲戌三月忝も
御國母桂昌一位尼公金を賜て佛像造立の資とすあ此時
十尊成彫當をあるありしより縁化響の意とる如く施財日
小多く竟り二十餘霜を経て完く本尊丈六の釋迦佛及び
阿羅漢等とて五百二十有餘餘の佛像縹緲として現れ其



梵相の奇古坐立の威儀儼然として生る如く其妙手常人のとる
 ところ所の膽禮する者として靈山一會未散の嘆のらむ八年
 乙亥夏五月鐘の銘よ 以聽小達一本境一千五百畝を賜ひ
 又天恩山羅漢寺の号を賜ふ依假又堂宇を造立して佛像を遷
 せると同年八月黃檗高泉和尚偶東行あり遠く點眼の導師とて
 又先師鐵眼和尚をくつ同山祖とて是其原を貴むの故とて又其時
 黃檗山の未寺とある松雲禪師其頃既伽藍建立の企ありとて
 時縁多しとして宝永七年庚寅一旦疾ふ罹る月を越えて起て終り
 同年秋七月十一日奄然として化せ時よ歳六十有二あり
 法臘四十二年

五百大阿羅漢尊號

第一
 阿若憍陳如尊者 阿泥樓頭尊者 有賢無垢尊者
 須跋陀羅尊者 迦留陀夷尊者 憍聞聲得果尊者
 梅檀藏王尊者 施懂無垢尊者 憍梵般提尊者

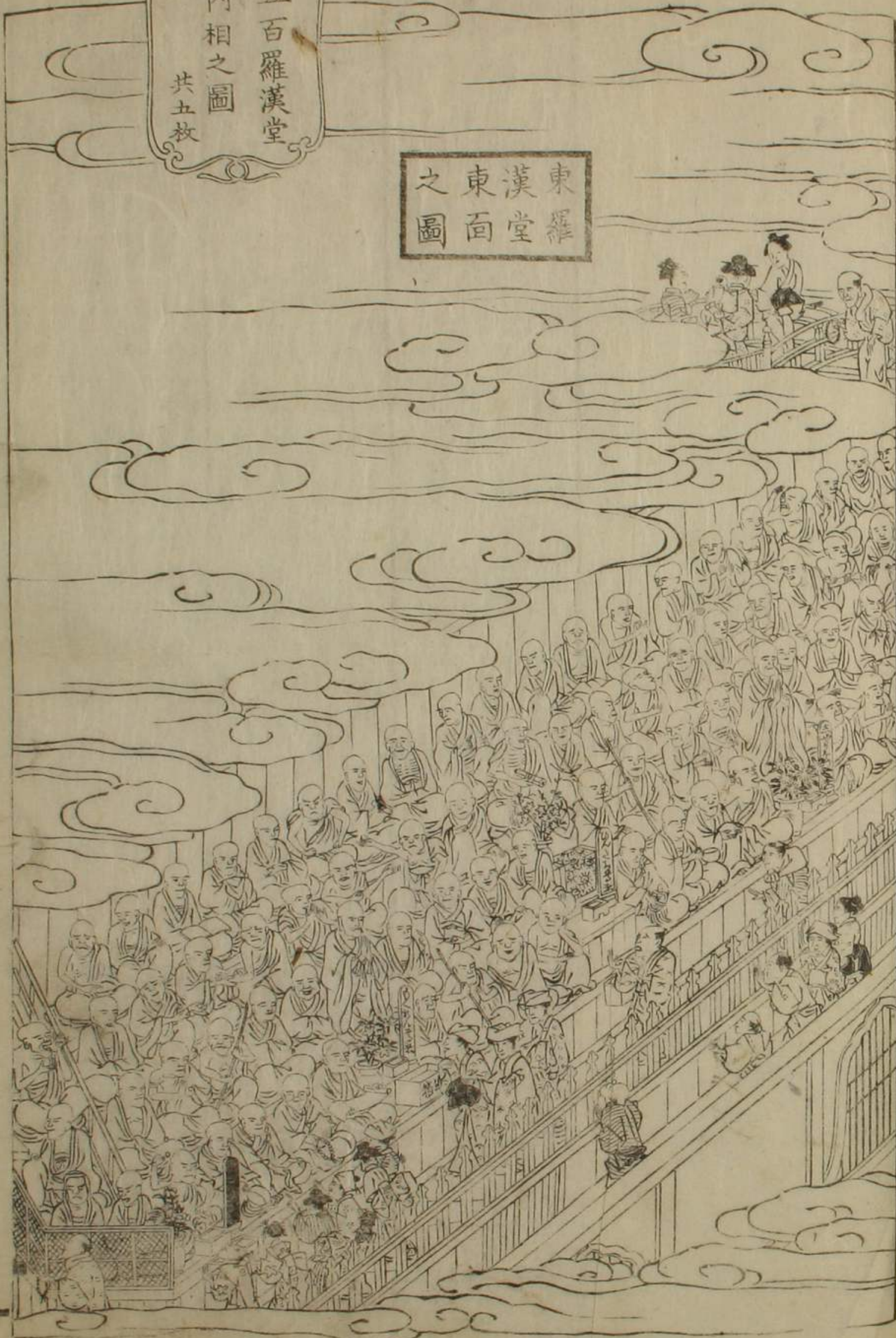
因陀得慧尊者
 第十一 優那行那尊者 婆蘇槃豆尊者 法眼四樂尊者
 難陀羅目尊者 佛陀難提尊者 末那提迦葉尊者
 第二十一 優波鞠多尊者 僧迦耶舍尊者 教說常住尊者
 商那和修尊者 莊嚴無憂尊者 憶持因緣尊者
 第三十一 迦那提婆尊者 莊嚴無憂尊者 憶持因緣尊者
 破邪神通尊者 堅持三字尊者 阿菟樓駄尊者
 毘羅羅子尊者 毒龍依多尊者 同聲誓首尊者
 僧法耶舍尊者 伐蘇密多尊者 闍提首那尊者
 第四十一 悲密世間尊者 獻花提記尊者 眼光定力尊者
 伽耶舍那尊者 伏陀密多尊者 富婆那夜舍尊者
 解空無垢尊者 顯空第一尊者 羅度無盡尊者
 第五十一 不著世間尊者 顯護世間尊者 無憂禪定尊者
 金剛破魔尊者 十劫慧善尊者 梅檀德香尊者
 金作慧尊者 金作慧尊者 金作慧尊者
 金山覺意尊者 十劫慧善尊者 梅檀德香尊者

敬首尊者	離垢尊者	無勝尊者	休息尊者	智積尊者	勇寶尊者	慧持尊者	帝網尊者	奮迅尊者	善住尊者	權教尊者	光曜尊者	慈寬尊者	歡喜尊者	普等尊者
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

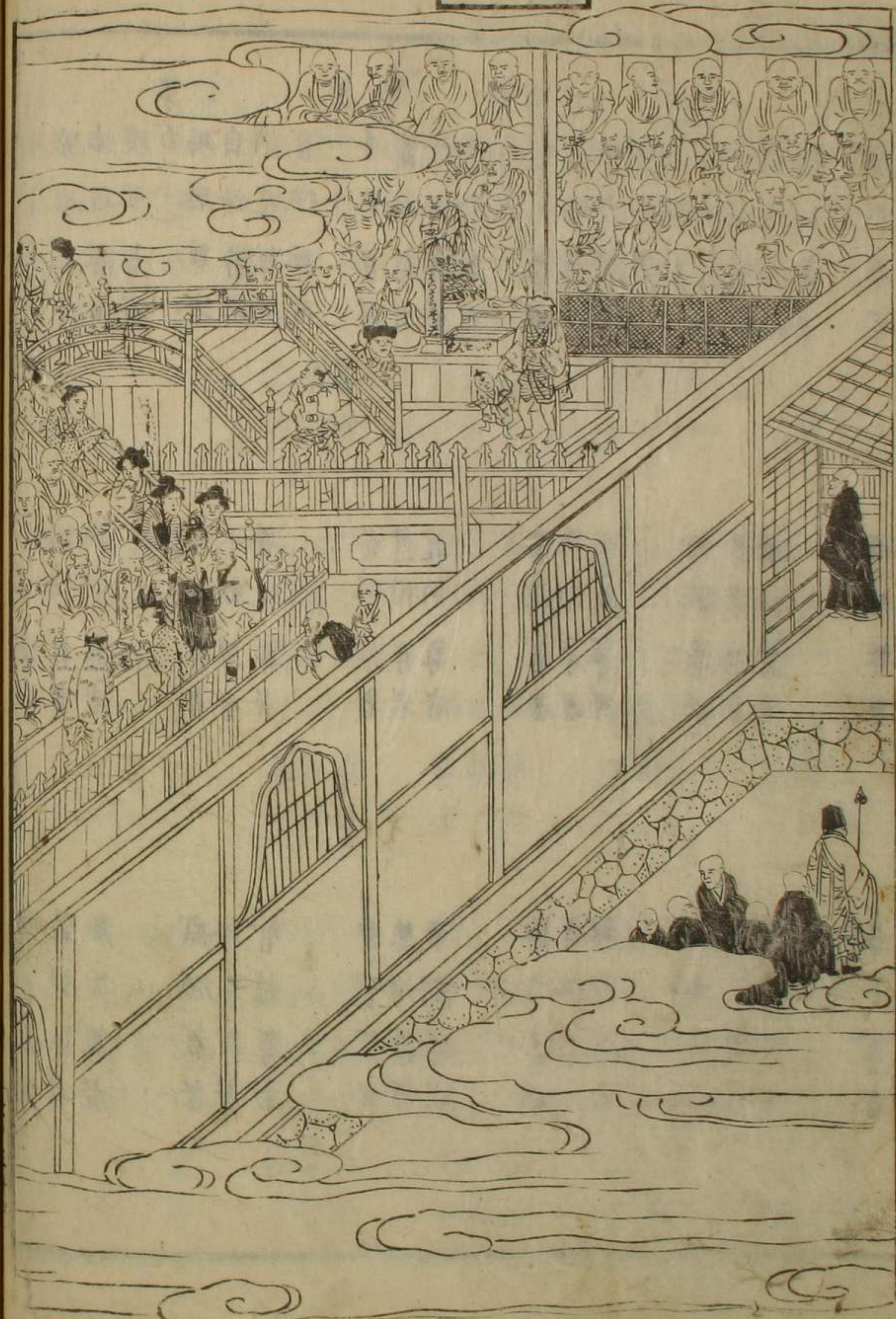
香	金	無	山	阿	三	解	無
象	髻	憂	神	那	昧	不	千
尊	尊	自	通	邠	其	空	劫
者	者	在	億	提	露	自	悲
		尊	具	尊	尊	有	願
		者	尊	者	者	尊	尊
			者			者	者

五百羅漢堂
內相之圖
共五枚

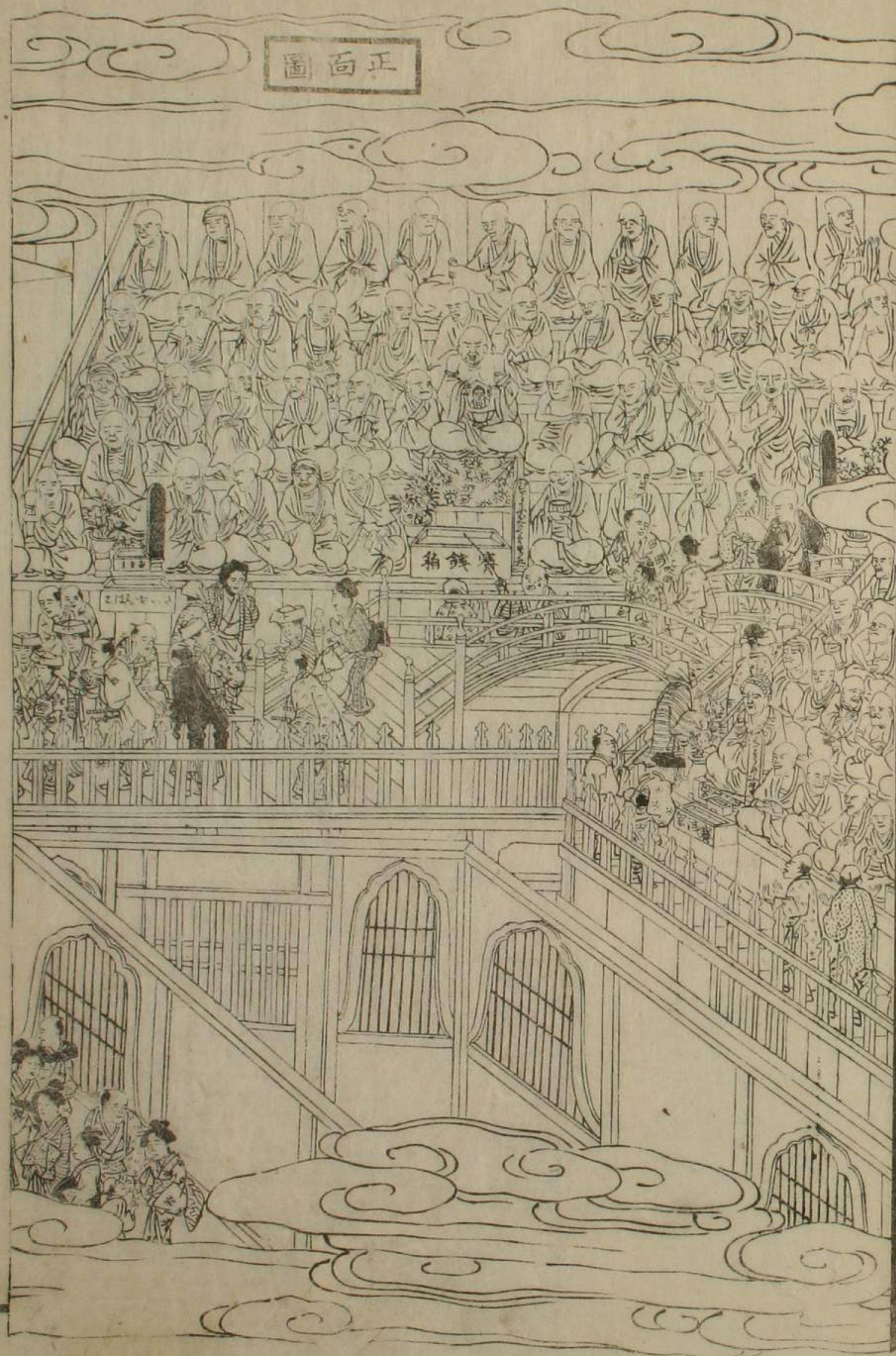
東漢羅
之圖



正面圖



正圖



東漢之西羅堂面圖



正面圖

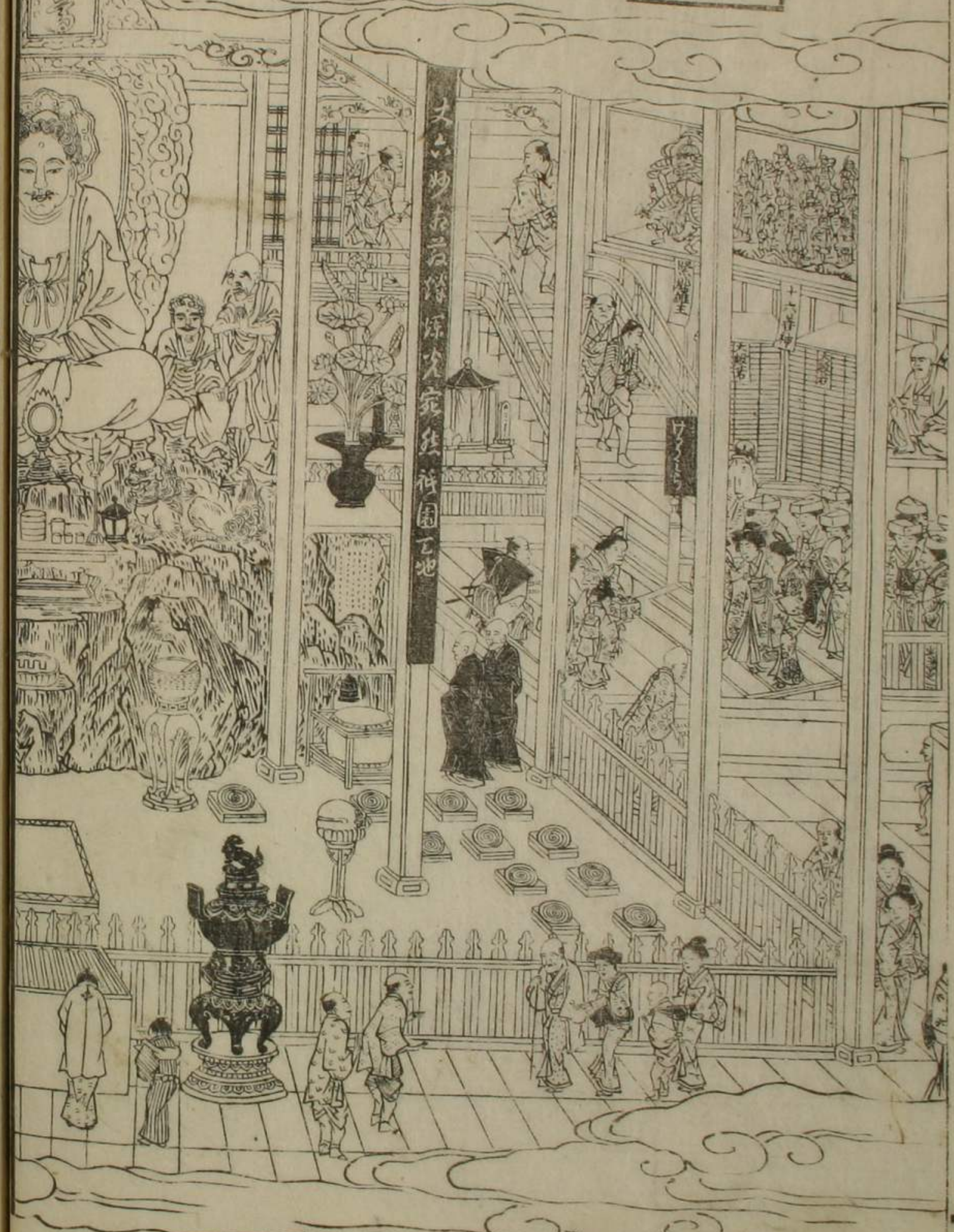


正面
尊之圖

版

諸

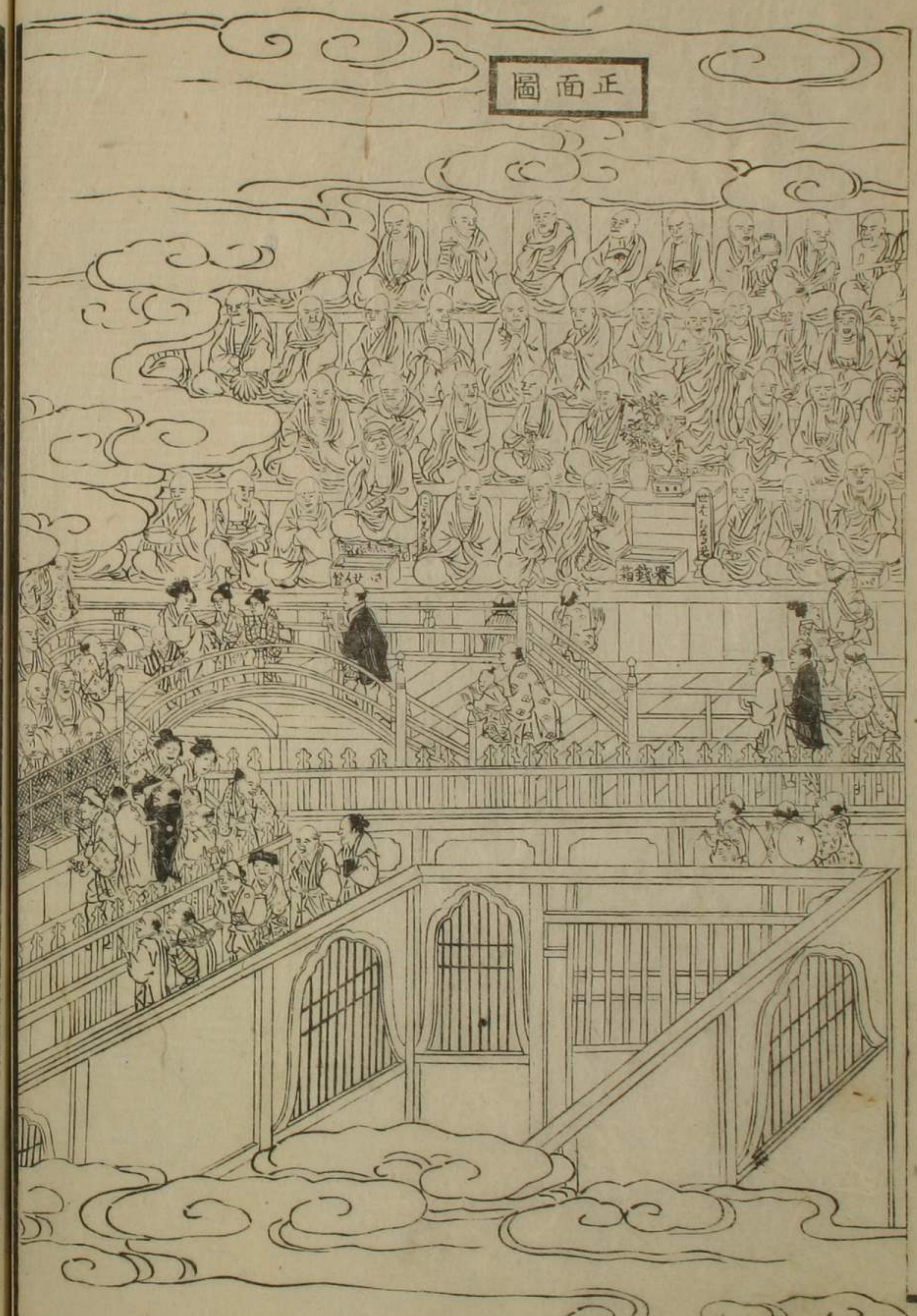
正面圖



西漢東之
羅堂面圖



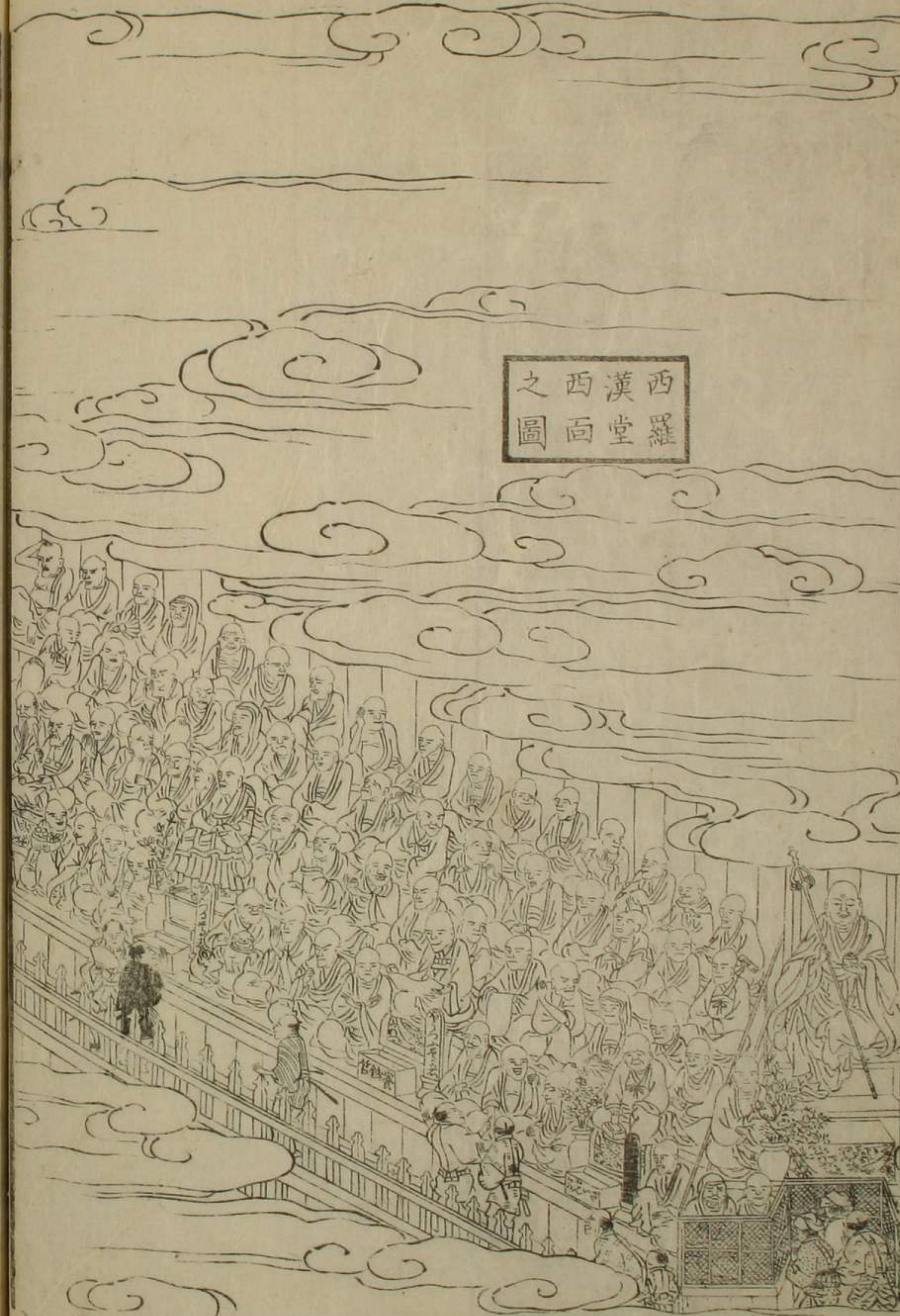
正面圖



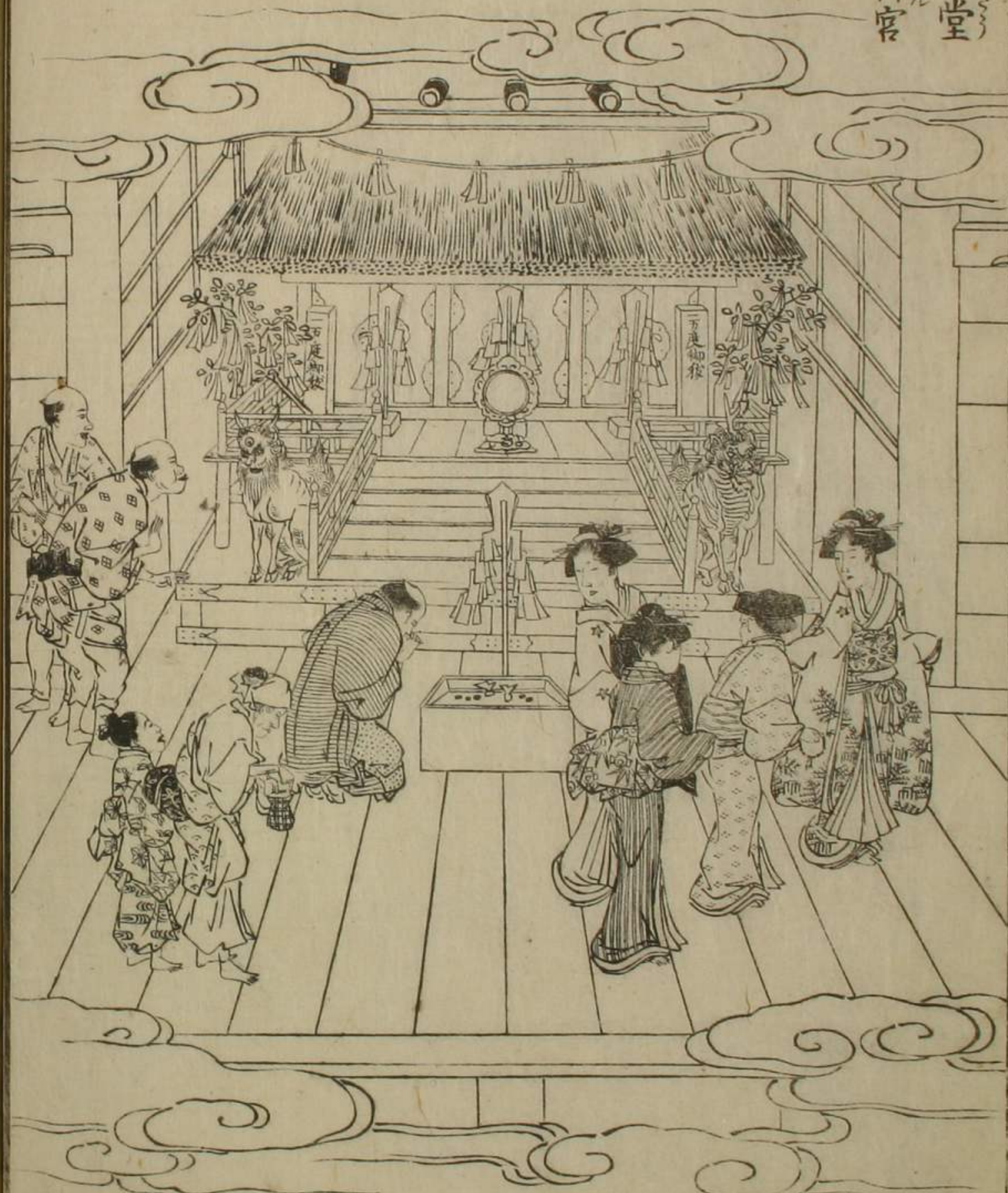
正面目圖



西漢西羅堂面之圖



羅漢堂
護法神宮



助歡尊者

難勝尊者

善德尊者
花王尊者

喜見尊者
變光尊者
善根尊者

善宿尊者
花光尊者
德項尊者

第百八十一
龍盤尊者

弗沙尊者
淨正尊者
電光尊者

德光尊者
善觀尊者
寶伏尊者

第百九十一
羅旬尊者

慈地尊者
滿宿尊者
大天尊者

慶友尊者
闍陀尊者
淨藏尊者

第百一
波羅密尊者

俱那含尊者
吉祥尊者
賢劫尊者

三昧聲尊者
鉢多羅尊者
金剛味尊者

第百一
樂覆尊者

心平等尊者
火燄尊者

不可比尊者
頗羅墮尊者

第 斷
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 護
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 寂
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 香
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 智
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 彌
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 淨
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 梵
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 猜
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 聖
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 曼
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 如
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 意
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 輪
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

薄俱羅尊者

須彌燈尊者

善圓滿尊者

乾陀羅尊者

舍遮尼寶尊者

提多迦尊者

尼默伽尊者

因地果尊者

阿逸多尊者

阿利多尊者

首陀羅尊者

利婆多尊者

波頭摩尊者

迦難留尊者

福德首尊者

水潮聲尊者

首正念尊者

不覺性解尊者

孫陀羅尊者

汰輪山尊者

天鼓聲尊者

魚比校尊者

第 多
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 威
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 阿
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 行
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 聲
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 光
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 行
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 金
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

普賢行尊者

普勝山尊者

誓金手尊者

慧依王尊者

藏律行尊者

施婆羅尊者

不可波羅尊者

持善法尊者

持三昧尊者

名無盡尊者

辦財王尊者

富伽耶尊者

摩拏羅尊者

降魔軍尊者

德自在尊者

阿僧伽尊者

第 阿
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 歡
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 須
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 持
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 智
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 彌
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 淨
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 梵
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 猜
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 聖
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 曼
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 如
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 意
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 輪
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 金
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 阿
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 歡
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 須
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 持
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 智
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 彌
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 淨
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 梵
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 猜
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 聖
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 曼
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 如
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 意
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 輪
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第 金
二百 妙煩
二十一 惱
尊者

第三百二十一

頭怡尊者

第三百二十一

須遠那尊者

第三百二十一

堅固心尊者

第三百二十一

功德相尊者

第三百二十一

白香象尊者

第三百二十一

識自生尊者

第三百二十一

聲引衆尊者

第三百二十一

大藥尊尊者

第三百二十一

勝解空尊者

第三百二十一

月蓋尊尊者

第三百二十一

菴羅滿尊者

第三百二十一

直福德尊者

第三百二十一

須婆利尊者

第三百二十一

蘇頻陀尊者

第三百二十一

瞿伽梨尊者

周陀婆尊者

甘露尊者

聲響應尊者

光明燈尊者

忿生心尊者

護淨願尊者

離業除尊者

福業除尊者

修無德尊者

轉檀羅尊者

項生尊尊者

喜見尊尊者

成大利尊者

衆德首尊者

住世間尊者

自在王尊者

德妙法尊者

應赴供尊者

執寶炬尊者

阿氏多尊者

定拂羅尊者

羅餘習尊者

喜無著尊者

心定論尊者

薩和壇尊者

喜藍王尊者

法首尊尊者

金剛藏尊者

第三百二十一

日照明尊者

第三百二十一

無量明尊者

第三百二十一

光明網尊者

第三百二十一

無憂眼尊者

第三百二十一

去蓋障尊者

第三百二十一

淨除垢尊者

第三百二十一

行願持尊者

第三百二十一

天眼尊尊者

第三百二十一

寶蓋尊尊者

第三百二十一

喜信靜尊者

第三百二十一

金光慧尊者

第三百二十一

伏龍施尊者

第三百二十一

蓮花淨尊者

第三百二十一

利亘羅尊者

第三百二十一

天音聲尊者

第三百二十一

大威光尊者

第三百二十一

寂上尊尊者

第三百二十一

持世尊尊者

第三百二十一

定花至尊者

幻化空尊者

調定藏尊者

自在主尊者

金剛尊尊者

超絕倫尊者

無邊身尊者

神通化尊者

摩訶南尊者

無盡智尊者

自明尊尊者

去諸業尊者

風陀怒尊者

除疑網尊者

無垢德尊者

坐清涼尊者

和倫調尊者

慈仁尊尊者

那羅達尊者

編具足尊者

思善識尊者

無量光尊者

金剛明尊者

賢首尊尊者

無垢稱尊者

明世界尊者

燭慢意尊者

月菩提尊者

最勝幢尊者

普莊嚴尊者
大塵障尊者

法心澍
上觀雲
尊淨雨
尊者尊
尊者尊
尊者尊

善行師
住魚子
義邊翻
尊尊尊
者者者

師子作尊者
勇猜進尊者
淨那羅尊者

摩訶羅尊者
壤魔軍尊者
質直行尊者

大熾妙尊者
高遠行尊者

悟真常尊者

拔導汰
衆大通
苦衆尊
尊者尊
者者者

鋒拔得
利度定
羅羅通
尊尊尊
者者者

迎目
旃捷
延連
尊尊
尊者

半	揭	迦	者	伐
託	陀	半	理	蹉
迦	尊	諾	迦	尊
尊	者	迦	尊	者
者		者		

大熾尊者
高遠行尊者

一音變動警覺曉昏
觀音大士如入此門
幽明莫滯功德難論
存沒俱利消融百冤
雲禪功烈函益乾坤

修洪規範解塵勞煩
田通無礙卻忘聞根
由聲生怡直證本源
國平氓泰斯子斯孫

元祿九年丙子四月穀旦 牛頭鍊牛機謹誌

掘樹 境内より文保五年庚申掘樹九十餘株を
挑の玄手 文保五年丙辰
當時の境内より掘樹九十餘株を

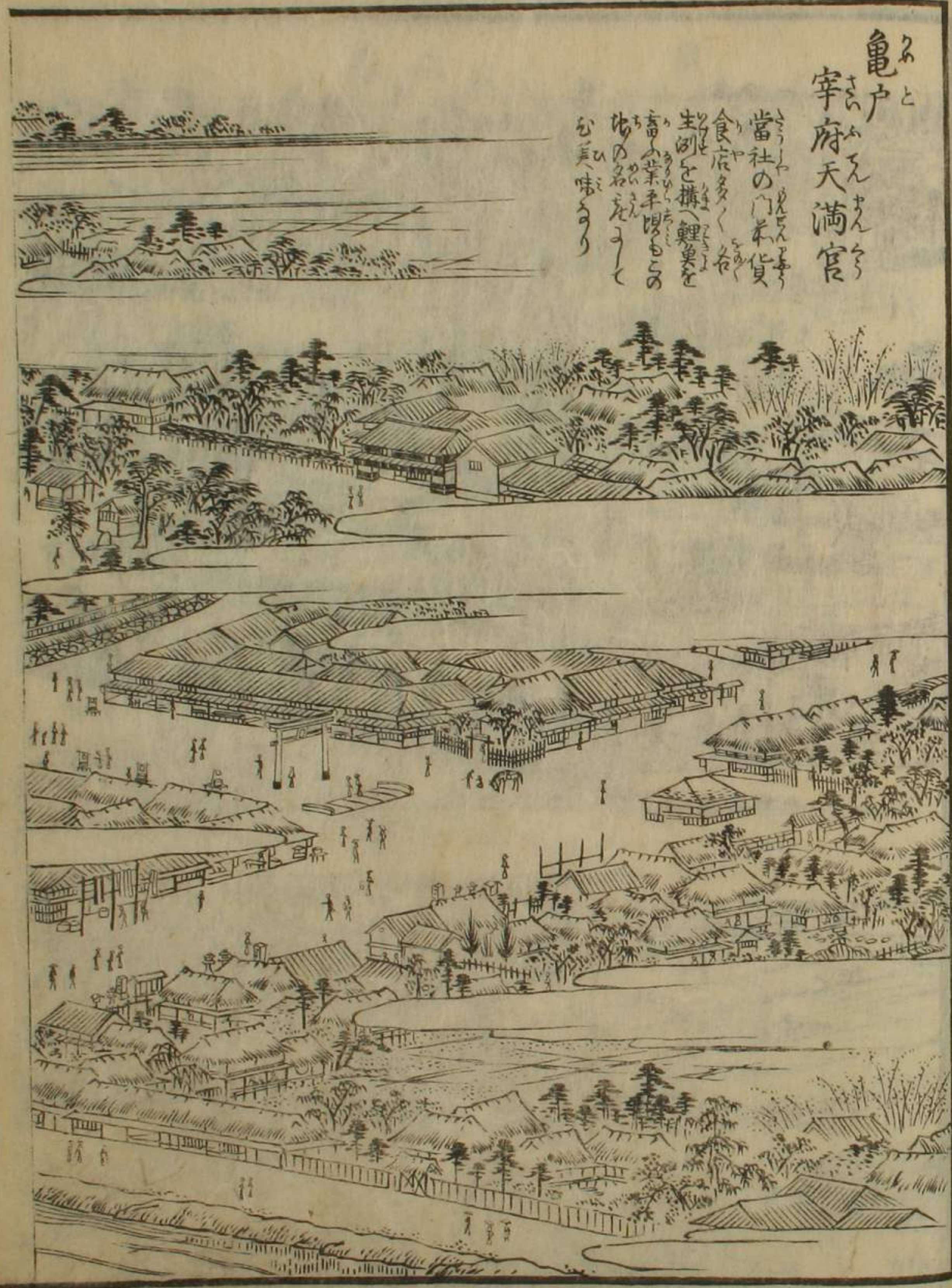
我々山堂 方丈の東より此の山保十八年の頃鐵眼禪所當寺を退玄の後
の像を遷移し三代堂にも遷し鐵眼禪所をひ象先和尚ありひは松雲老人
禪所の行はるに松雲老人の碑文に詳なり
中興象先和尚の黃檗四世の法孫として鐵眼禪所の法脈なり
當時松雲禪所化寂の後假堂も破壊し佛像も雨露の
乃に侵されたりを深く患う 正徳三年癸巳本所鐵眼
和尚の命を受始て大に戸を来り當寺に住して享保二年丁酉
正月より十有餘年の間心肝を碎れ寒暑風雪の厭あり

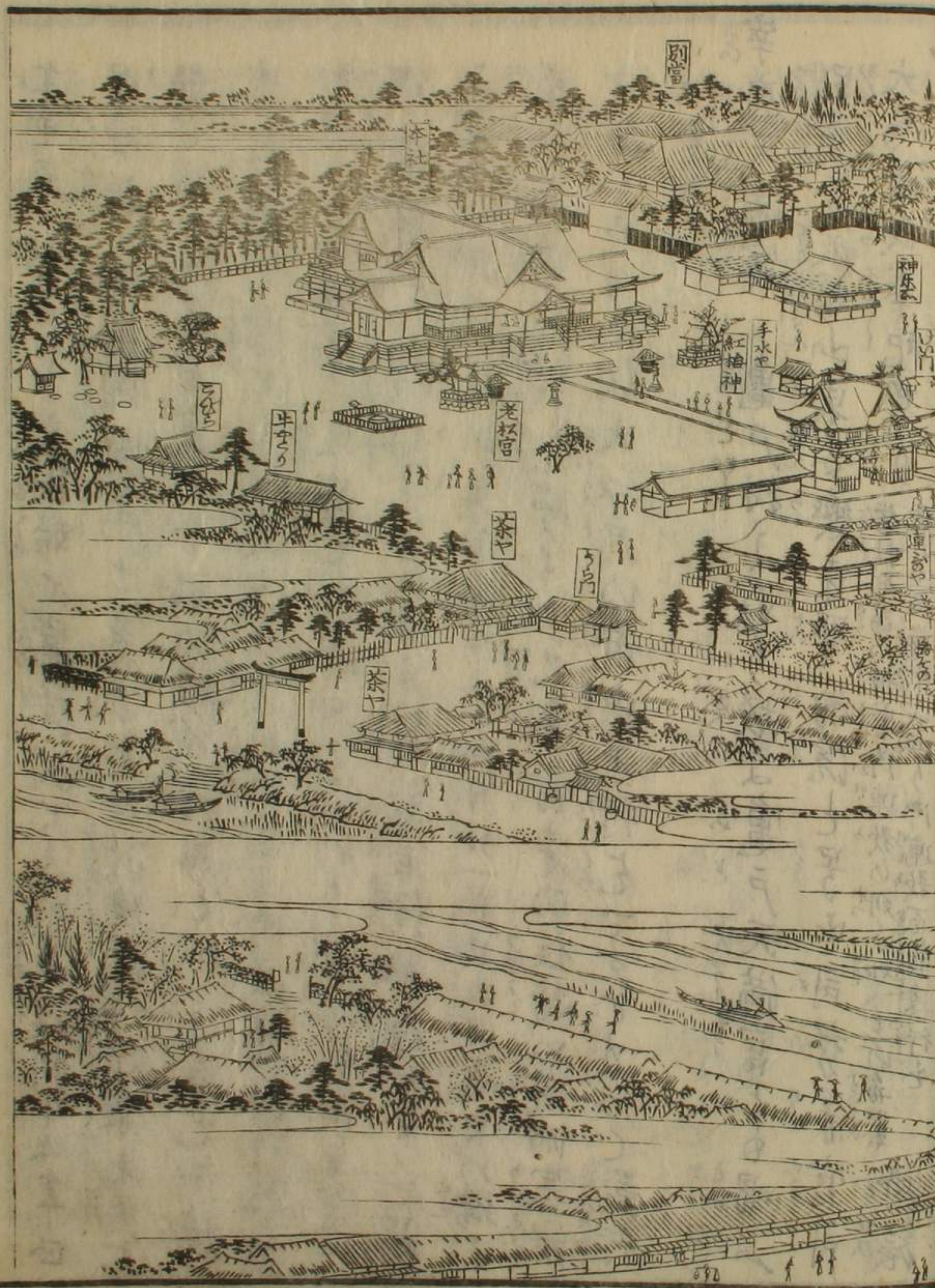
日々に府中の街市へ入て行くと既して勸進の功成裏に受
る所の一握一投の采儀を積て其料に兄同十年己巳より今
存する所の佛殿僧房悉く建立成就せしを依同十四年己
酉二月丙堂惣供養の大法會を行ひて孟蘭盆の大施餓
鬼會を用く當寺岡山象先和尚たる其に顯然たり
とひとも故ありて鐵眼禪所を岡山と自の所實則和尚
を二代として松雲禪所創業の大功あるを以一代開基と稱し
自三代の席に坐せしる隱え禪所歸化の後持齋一食うて
深く貧者とのれし佛像經卷と古た袈裟の外より聊も
聊に貯ふる事なり 日々の勤行より般若經分五卷と花嚴
經行願品百五十卷とを讀誦し觀音の尊号を書寫せしる
其教讀て山の如く又大般若經一部六百卷一字百禮し
是を書寫し其先出家得道の時持鐺親手に入て法道成

就の誓願を發し三年の間に双手の指紙切八十卷の花嚴經を
 血書せ其後當寺殿堂の管大手成といふとも宗門の坐禪
 夏冬の結制行れさうと願典よりと依後住榮朝野命
 を受てえ文二年丁巳の冬洞涖兩首坐を立て五千指の僧を
 集め江湖の大會を行ふ時
 坐禪の行相成さるるを則江湖の僧財よりて米五百俵
 をたもつて夫より後般若の全文を真讀しと漸れを致す
 竟に寛延三年己丑六月五日七十三歳よりて涅槃の大定
 に入貴銭香花を捧じとほとひ来るより三日之夜炎暑甚
 しくといふとも遺骸聊変る色あり茶毗して全身舍利となる
 其舌根の室塔に収て今將
 中興堂に在り
 當寺の黄檗流に戸最大の禪園よりて佛閣の巍々たるを
 日域に如くといふに元禄年間寺領山号等を賜り享保九

龜戸
 宰府天満宮

當社の門本質
 食店多くあり
 生祠と稱し鯉魚を
 畜し業手場もこの
 地の名をとりて
 名実味あり





大樹始て當寺へ入せり其後同十五年正

齊聽聞翌年十二月方丈より陞坐住持象先是を

勤とむ同十九年甲寅三千畝不の地紙添あり同二十年乙卯境り

肉は新殿を管せしより後此地より
御放鷹のお後を

わろくを當寺へ立寄せあるとされり月毎の報目よ

觀音藏法を發行し十五日の大般若經轉讀あり七月

又垂れ毎夕詭賊鬼を獲て十六日廿日廿五日晦日の殊に

道俗群衆之象先師より已來當寺の住持ハ風雨寒暑

を厭はせしむるに大江戸の市中を行乞をせめて勤行

龜戸村

あり坂は亀戸天満宮とも喟め

別當を天原山東安樂寺聖廟院と号し司務兼官司

當社列ある柳堂津連發の列々如くられ毎家
正月土月當中より柳堂津連發百韻通行せし
津之旅

ちやんのはなまのきくら　うー
 筑前國板寺の摸るり
 ちやんのはなまのきくら　うー

りまのあふまを

相殿あひだん
土天つちあめ
師し宿しゆく稱しやう
命めい
二坐

老松殿 ひまわり 花洛北野の

御嶽社
本社の右より、叡山の座主
法住の意僧の聖と勸請

一の目を巧く
 毎目とて
 花園社
 街の右

神あまみこと
國くに福ふくすさうその外ほか陽やうにいひ至いたりけしとおほ内うち而しかもうこ
日所ところあり昔農なり耕かう業ぎやうをた仕つかひの時とき同

の病尤^な迂^うの人みそやうゆゑに打痛^{うちいた}ぬかふよりき
よて麻^あの上^{うへ}に新薦^{しんせん}を敷^{しき}て清^{きよ}くたてまはる

紅い色とのちやうひーとある。諺をまゝう
 へで傳へしけれも後には青赤の二鬼きてあり
 兵衛

連教家

放言の此連發翁の云々をひくとく

菜神供 に七回令斬る菜の餘をたぐ
かんしん きよき
はつろく てえんより此目よ

五月當社の神忌よりして二十四日通夜連日
二十五日午附より至り神前よりひて社人等梅の

五元集
 元禄十四年
 二月二十五日
 聖廟八百餘
 御年忌於
 龜戸御社詩
 歌連御令與
 行一坐

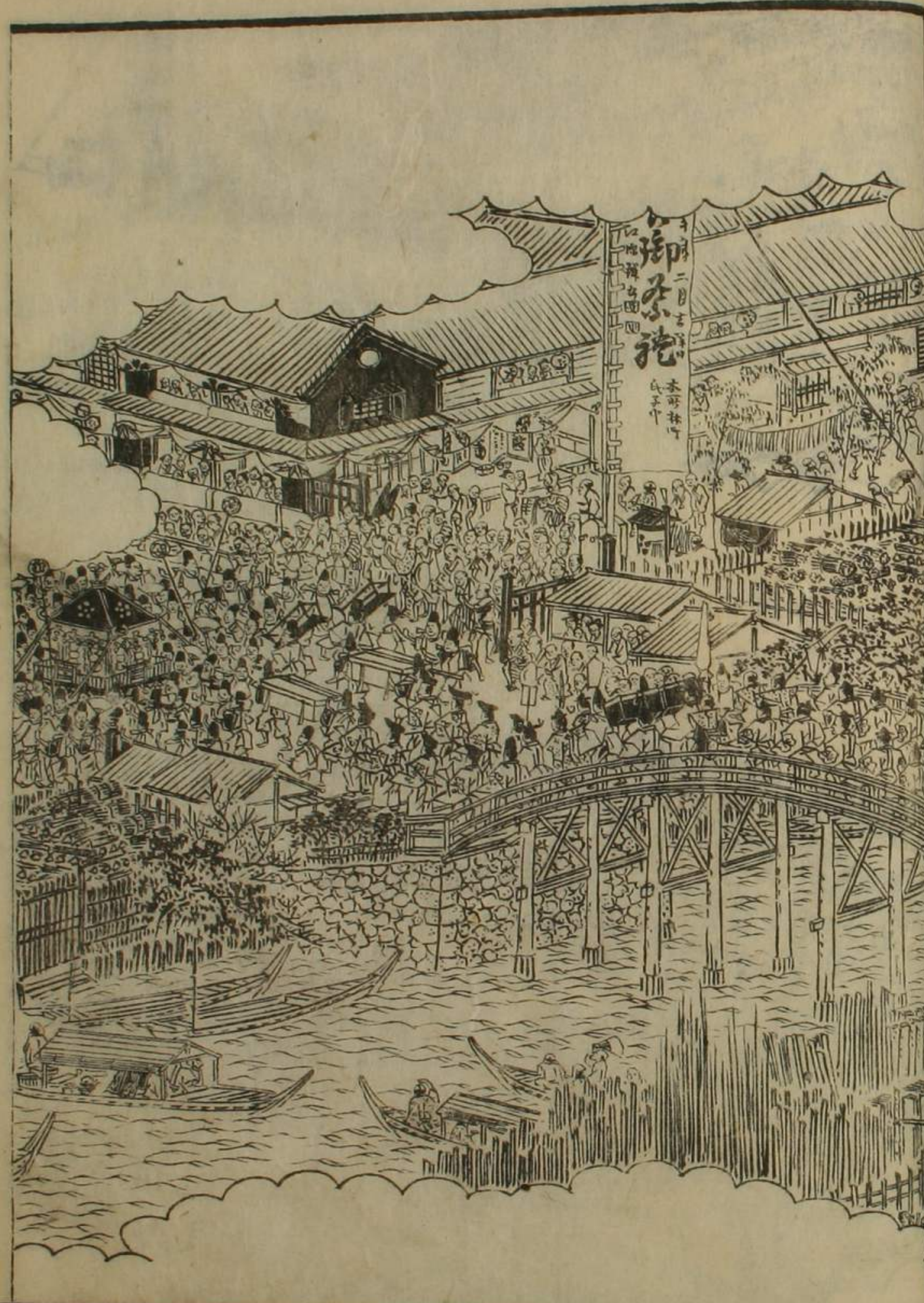
梅松
 戸

二月二十五日
 菜種神事

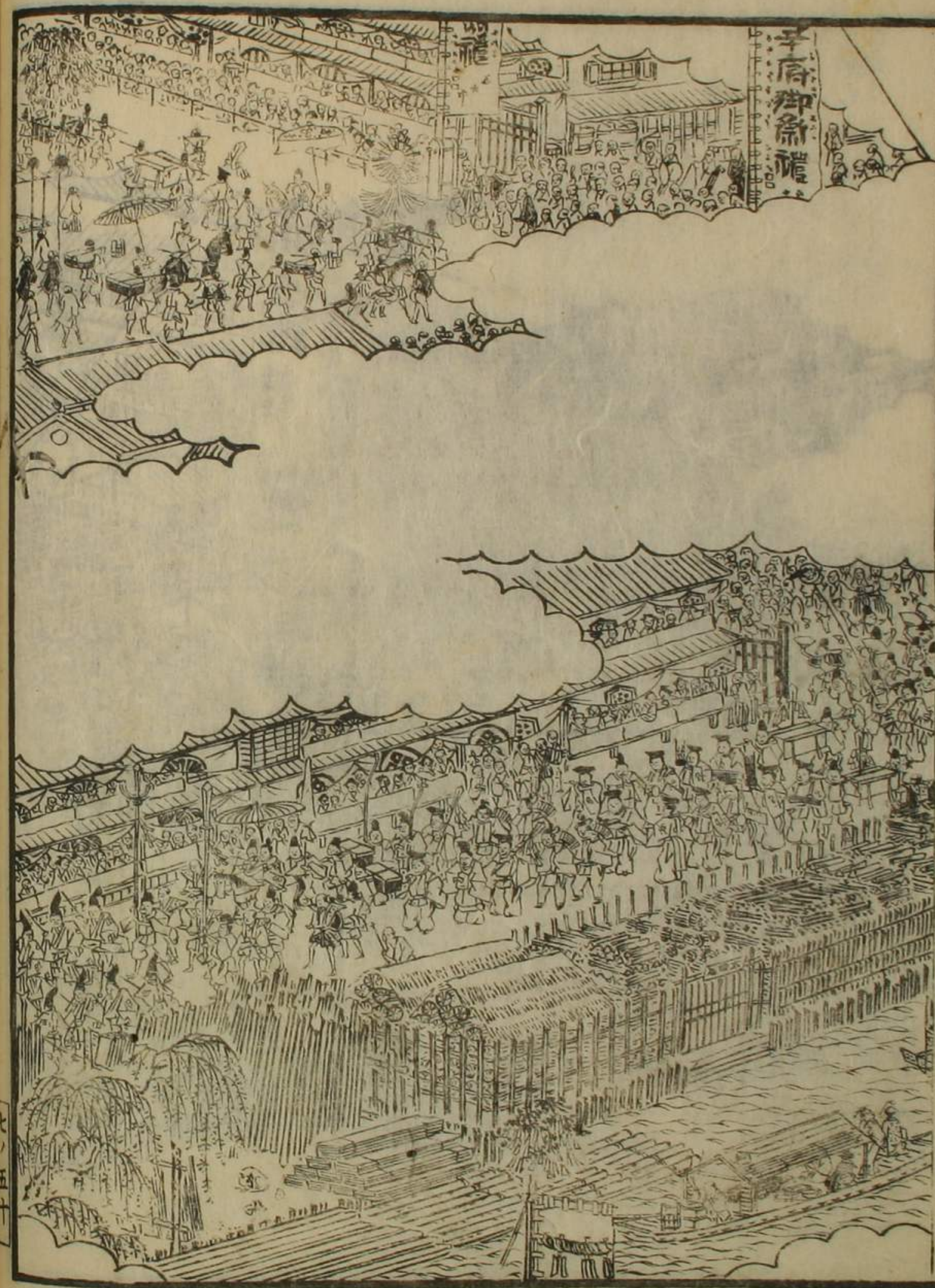
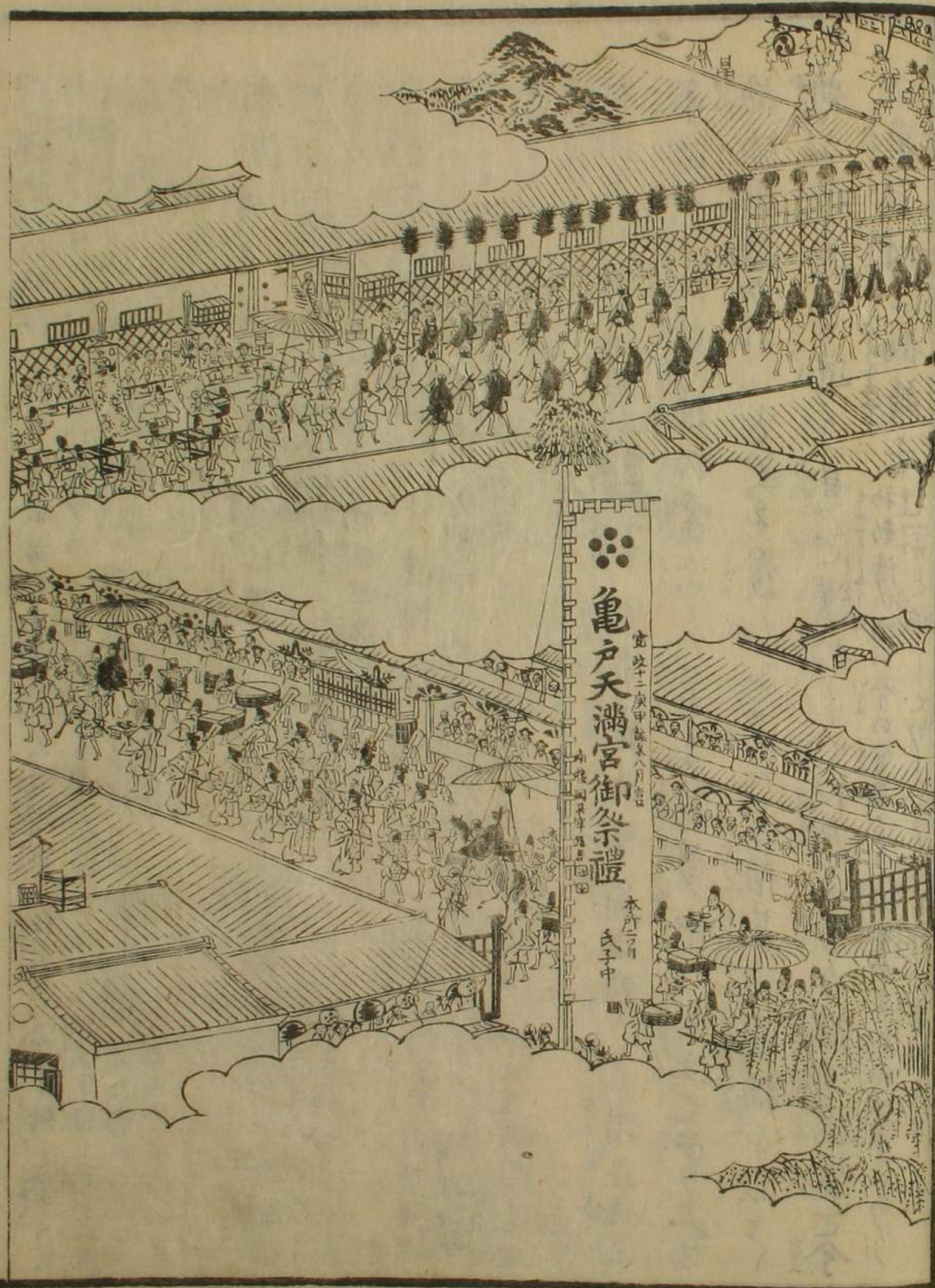


あけび
 板也
 八百
 其角





亀戸天満宮祭礼
 神輿渡御行列之圖
 毎歳八月廿日お祭所
 の御旗本御幸あり
 て御祭禮あり
 産子の所も縁あり
 都鄙のまじり合は
 けきの一處あり



社記云 祠信祐の苗裔なり 始筑前大宰府より一頃正保三
年丙戌一夜菅神の靈示を蒙る其夢中 十立て常ある
梅の推枝うれ とする後句を得たり 依其後赴梅を以て
新の神像を造り是を護ちて江戸より彼天満宮を今
の亀戸村に勧請す 初勧請の地は今の官居より東南の方耕田の中より
追繼神事 當社の祭式はもと大宰府の例に準ふる 俗より一社の法式ありむ古
月見連歌會 九月十五日 火燒神事 十月十五日 年祓神事 二月晦日
祭禮 隔年八月二十四日は後水尾帝の勅許より非興供奉の行進にて大宰府の例式は
進んで見物なり 利當大鳥居氏神車を生子の町より由徳物車樂等を以て其
うらを呼ぶなりとあり 雷神祭 四月朔日より七日 神沖衣 四月晦日と九月
名祓枝 六月二十五日 豊川の西大河に七夕和歌連歌會 七月七日は
祭禮 隔年八月二十四日は後水尾帝の勅許より非興供奉の行進にて大宰府の例式は
進んで見物なり 利當大鳥居氏神車を生子の町より由徳物車樂等を以て其

社記云 祠信祐の苗裔なり 始筑前大宰府より一頃正保三
年丙戌一夜菅神の靈示を蒙る其夢中 十立て常ある
梅の推枝うれ とする後句を得たり 依其後赴梅を以て
新の神像を造り是を護ちて江戸より彼天満宮を今
の亀戸村に勧請す 初勧請の地は今の官居より東南の方耕田の中より

其後寛文紀元辛丑 台命を蒙り同年壬寅始て今の
地を賜ふ 同三年癸卯官居を管心字の北樓門ホと
す 社頭の光景宰府の侍を摸り依日十一年辛亥
後水尾帝震翰を瀧江菅神の号を以てあゝ又え祿
十年丁丑一社の神事法武等宰府本官の例に準て處さ
ひ 同帝の勅許を蒙る爾來神威顯赫として靈瑞昭
著る 當社至寶と稱するの菅神佩とてこの天國
の寶釵なり

福聚山普門院 善應寺と号と同所 一丁より東の方あり
善云 常より今日大目如來を本尊とて
香燭の料を元とせしむ 昔 大樹 竹放翁の碑 内腰を
沖腰懸松 堂前よりあり 故より名あり
は用ひ普門慈眼の意を
とるなりとせ

香燭の料を元とせしむ 昔 大樹 竹放翁の碑 内腰を
沖腰懸松 堂前よりあり 故より名あり
は用ひ普門慈眼の意を
とるなりとせ

普門院



身代觀音菩薩

當寺に安んずる傳教大師の像なり

緣起云大永二年壬丑千葉公成を主自胤兼胤の孫なり三勝の城中一

字の梵刹を圍此西面像を安置一長賢上人をて始祖

たり今今の普門院なり三勝とて隅田川邊荒川の落合に三侯

沈没を其地を築つて障子とて呼ぶ元和二年城守住持景真法印公命よりて三勝の

善次盛光後藤盛光上座名の眾にり講を伏せ時日頃念す

不の此靈像の加護りて其白刃段々に壞一危難を避るたり

又天文三年國中大疫疾流行

死に及ぶ者少なりとこれと此靈像を念する輩の悉く病

平愈一病に臨る者病者と床を等とていとも散て保

延の患なり其後任拍長榮上人睡眠の中一老翁の来るあり

吾は是疫を受故に病苦

吾は是疫を受故に病苦

吾は是疫を受故に病苦

龜戸邑
道祖神祭



毎歳正月十四日
此の夜に風行くと
此の童子多く
あつて花垣
造りよしたる
小き船に彩の
幣帛を建松竹杯
をも粧飾し其中
大に宝舟といふ
を添へて舟を建
たりて舟に童子
を連て此の夜を
持ち行なり其夜
童子集會して花
垣を
恒例とす



一身に逼るり上人願ひ我法一千座を彼して予う救世の加彼
力とあるへーと夢覺て後益殺車を加へ卒うを予う奉る小
佛跡へ行くと蓮臺に法る感後肝の命一まより昼夜不
退一千坐の觀音供を彼して圓中頓に疫疾の患ひを
遁とくると故に世俗身代觀音と唱へるなり
卧龍梅 月所清香庵あり俗間梅屋敷と稱ひ其花一品
うて重辨潔白なり薰香至て深く形状宛も龍の蟠卧
如く圍中四方殺十丈の間は蔓て梢高々と枝毎に半の
地中に入地中をうへ枝莖を生し竹を幹ともりきそり
わくも屈曲ありて自其勢を彰と仍卧龍の号ありと
より梅譜は卧龍梅就杯とるなり

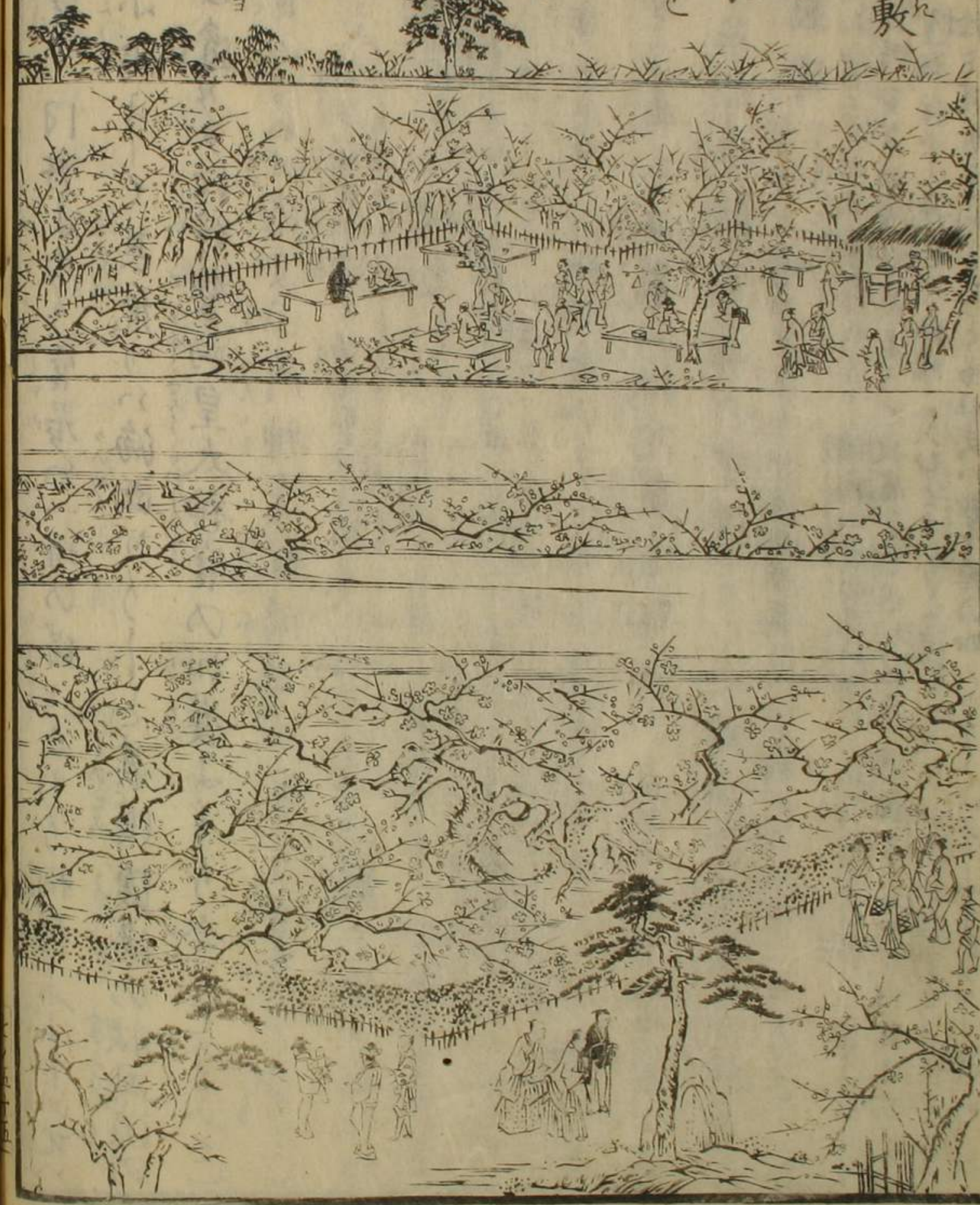
梅譜曰 公都城二十里有卧梅偃蹇十餘丈相傳唐
物也謂之梅竜好事者載酒遊之云云

神明宮

月所あり宮居の一堆の塚よりあり相傳へ上り此の

一の小嶋よりて其繞り海面なりと其頃渡海の船風浪の
難く遠くは行勢兩皇太神宮の加護より命を全ふせ
報賽のため此地に月所神を勧請しより宮居を營じ
とつて
今も此の比船多く船るなり入と唱へるなり
網干根と云は社
の傍よりありて神木とて昔は思ひはくは海より一頃漁者の網を
穿て土中より漁網は具と名づくるものあり今も此の地の地を
より人云はくは網干根の一名を大平根と号し社地をも大平根と稱する
明王山東覺寺 同所南の方にあり真言宗よりて寺嶋の蓮
華寺より属と本尊の弥陀觀音勢至の三尊なり當寺は享祿
四年辛卯草創とる所の寺院よりて岡山を玄覺法印と号し
不動堂 當寺は安置を良疾僧都の彫像よりて相列大山寺の寺と
縁起曰當寺は住古草庵より一頃岡山玄覺法印に住せらる猶より一
辛卯或時負足の優婆塞まりて投宿を乞ふは法下許諾し其夜同床は
法下怪し其命を問とてとも壯まハ聲惡の如くよりて當寺なるなり其時投

梅屋敷
白雲
舟を
はむ
や
梅の花
嵐雪



如月の花盛
ふいふ
強の雪
散る餘香
芳きこ
後宮と
を採りて
乾し
とて常
を賣る
殊に甘美
るれ
花賣す
うれ
わが
と





香取左神宮





りんと
 亀戸邑の常光寺の江戸
 六阿弥陀回第六番目
 るり香秋二度の彼岸
 中都鄙の老表参詣
 群集
 五七

祭礼を行ひて、頃此辺に於て海面あり、其春を流し、其止る地を以て後所と定へ、と誓ひたり。其春の如く止る、と云ふなり。故に今も昔の例より、僅の間あり、由十間川より、て神輿を舁、後所へ神幸なり。と云ふなり。

東林山寶蓮寺

善藏院と号す。其真言宗より、寺嶋の蓮、其の属に、その虚空藏菩薩の行基大士の作あり。其の属に、その虚空藏菩薩の行基大士の作あり。其の属に、その虚空藏菩薩の行基大士の作あり。

其の属に、その虚空藏菩薩の行基大士の作あり。其の属に、その虚空藏菩薩の行基大士の作あり。其の属に、その虚空藏菩薩の行基大士の作あり。其の属に、その虚空藏菩薩の行基大士の作あり。

其の属に、その虚空藏菩薩の行基大士の作あり。其の属に、その虚空藏菩薩の行基大士の作あり。其の属に、その虚空藏菩薩の行基大士の作あり。其の属に、その虚空藏菩薩の行基大士の作あり。

西歸山常光寺

同所、丁あり。其の方にあり。曹洞派の禪刹なり。其の方にあり。曹洞派の禪刹なり。其の方にあり。曹洞派の禪刹なり。

其の方にあり。曹洞派の禪刹なり。其の方にあり。曹洞派の禪刹なり。其の方にあり。曹洞派の禪刹なり。其の方にあり。曹洞派の禪刹なり。其の方にあり。曹洞派の禪刹なり。

其の方にあり。曹洞派の禪刹なり。其の方にあり。曹洞派の禪刹なり。其の方にあり。曹洞派の禪刹なり。其の方にあり。曹洞派の禪刹なり。其の方にあり。曹洞派の禪刹なり。

龜命山慈光院

同所、十間川を隔て、向あり。當寺も洞家の禪刹なり。同所、十間川を隔て、向あり。當寺も洞家の禪刹なり。

同所、十間川を隔て、向あり。當寺も洞家の禪刹なり。同所、十間川を隔て、向あり。當寺も洞家の禪刹なり。同所、十間川を隔て、向あり。當寺も洞家の禪刹なり。

吾孺權現社

同所、十間川の傍あり。此地を吾孺森又浮洲と云ふ。同所、十間川の傍あり。此地を吾孺森又浮洲と云ふ。

同所、十間川の傍あり。此地を吾孺森又浮洲と云ふ。同所、十間川の傍あり。此地を吾孺森又浮洲と云ふ。同所、十間川の傍あり。此地を吾孺森又浮洲と云ふ。

本社 祭神 茅渟媛命 一坐

日本書紀神代卷曰、日本武尊初至駿河、其處賊陽從之、欺曰、是野也。麋鹿甚多、氣如朝霧、足如茂林。臨而應、將曰、日本武尊信其言、入野中、而覓獸、賊有殺王之情、放火燒其野。王知被欺、則以燧出、火之向燒。

而得免云王所佩釵蓂雲自抽之薙攘王之傍草因是

津王曰殆被欺則悉焚其薙衆而滅之故武羅玳毛燒

有從王乃相摸欲往暴風總起高言曰是海耳可渡時

之身曰今風起浪必入海言訖乃披瀾入神心也暴風即止

相生樟本社の前右のたよりなり其連環と稱するものなり二根二幹ありつら

と宣ひ所より自廟の東の地よりさへぬいよ

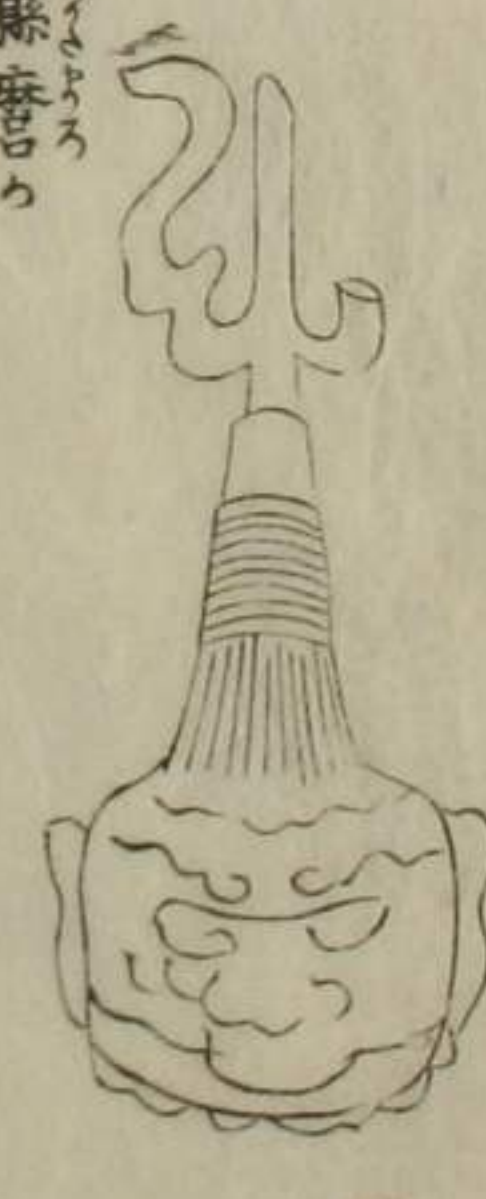
其傍より樟の葉あり長も根幹あり

神寶古鈴一口銅色愛をへ

是より日きりの常陸の鹿嶋正寺にあり又鹿嶋縣磨の
寺にも蔵せり其形は大同小異ある故に書を臨みかゝる

鹿嶋正寺藏

藤原縣磨藏



社記曰人皇十二代景行天皇の御宇四十年皇子日本武尊東夷を

征伐しあの時相摸國より上総國に往けり王船は来たより

海中にありあゝ頃暴風忽起り王船漂蕩て渡るへく時

妾茅渚媛曰今風起浪必して王船没せんと欲して是必海神の

心なり願ひ妾の身を以て王の命を贖ひて海に入むと言訖て淵を

披て入るに暴風即止り王船もよきり得るあり

其後茅渚媛の沖裳此邊の海上に浮ひけれの尊群臣は

命して此所より収め壇を築りしめ端離を巡りて沖廟とせり

又其沖廟の寄りたるを収揚て沖陵を造る今相摸國の古妻明神なりと云

荒陵のみありしを承久元年北条泰時が幕下鈴本集人三神尾

采女井出大寺等の諸士小祠を創營し神領三百石を附たり

一とあり其後永祿の頃小田原北条家の臣幸山丹波守當社

を再興せりとあり

わづ ます りり
吾 孺 森
わづ ます りん
吾 孺 推 現
れん りん
連 理 樟

鳥りあ

あけまの

叢戎

足

17
2

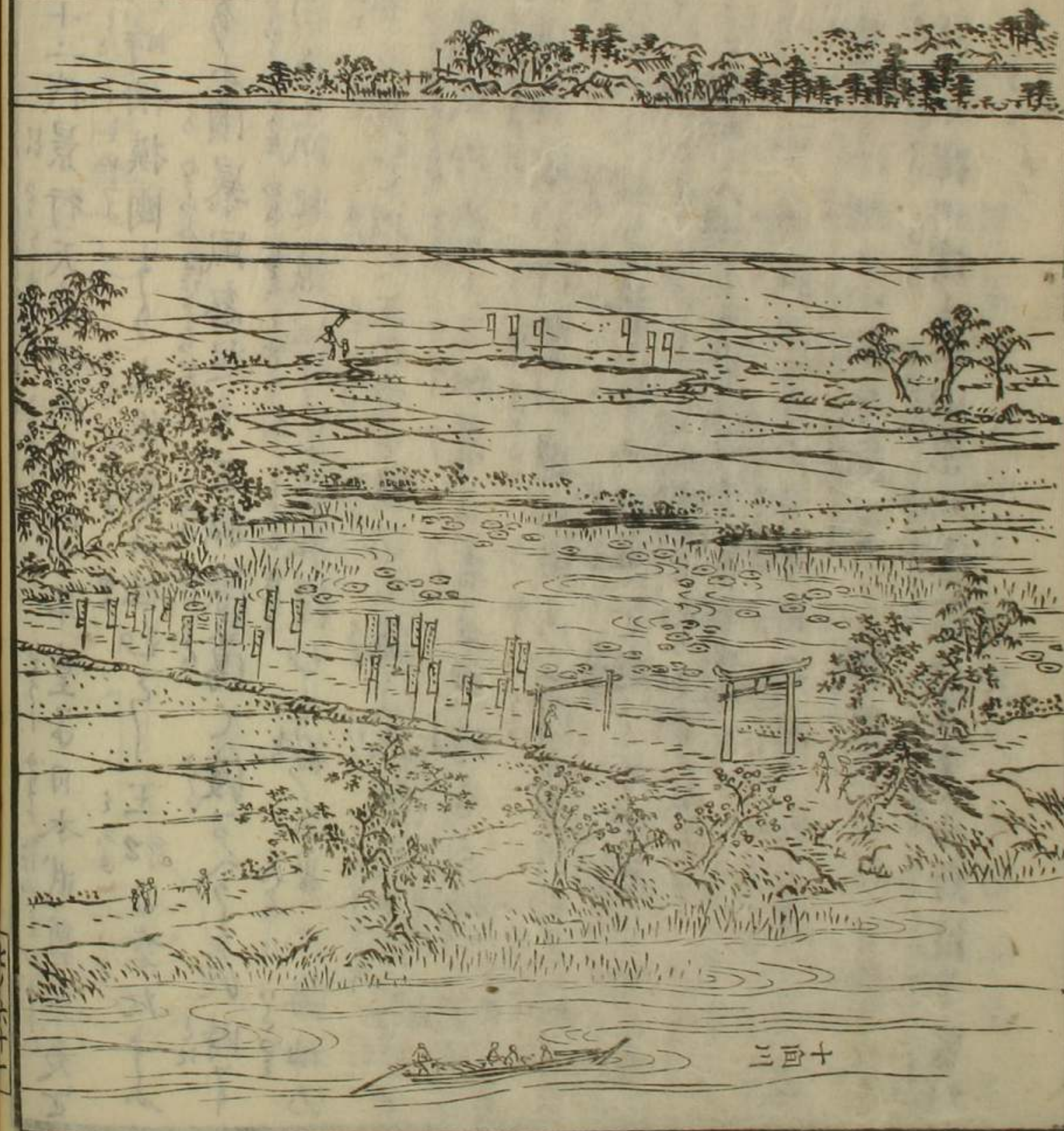
入
2
の

波
子

あ
人
る

蘇東坡先生
入石

あるものゝ とな せぬ
此れ勢の田後勝
入道のわらわぜー
よりゆと
ものかといふるわ
の事^{ふみ}に戦たりー
自の前ありその
ち^ちにこの事^{こと}の
なり^{なり}もの
義の東人といふる
住^ぢーありとあり
この東人といふる
人^{ひと}やSatami
考へて





日本武尊東夷征伐
 其海上暴風忽起
 王船漂蕩危殆
 幸而得獲
 乃命之曰
 海神
 竟又調を扱
 て入れたまひ
 日本紀
 云々

龍眼寺

庭中秋を多く
裁て中秋の一
奇観たり故に
俗呼て秋寺と
稱せり萬葉集
茅子と作り和名
抄鹿鳴草と作る
續日本後紀に
仁明帝永和
元年八月清涼
殿に内宴を
是を芳宜華
の燕とめと
ありて皇朝
古より秋を



愛せられ
事やの





押上

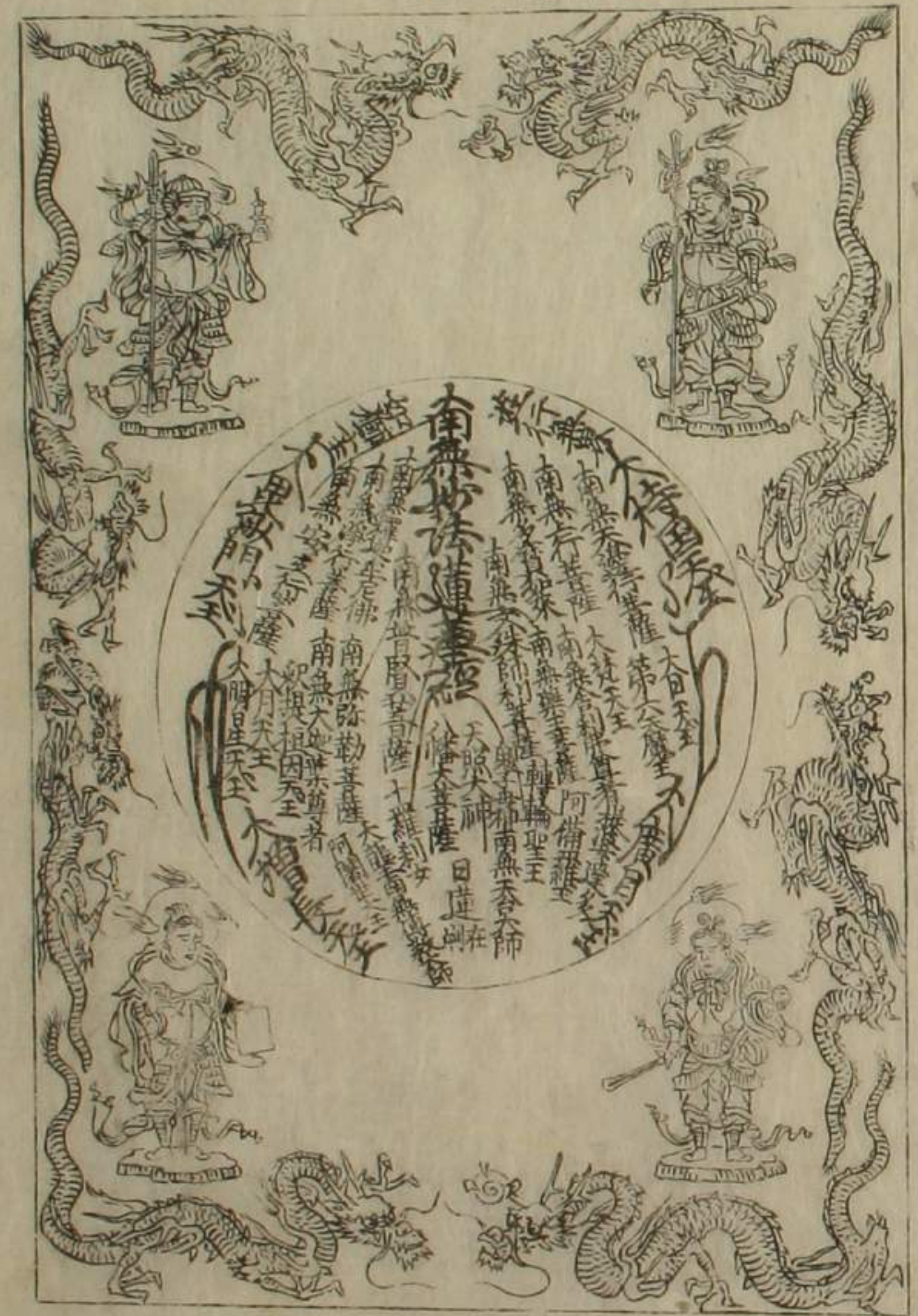
最教寺

常寺は蒙古
退治の旗曼
茶羅あり



のろゝ書一ひの所の日蓮上人真蹟の曼茶羅の旗あり
境内あり本山身延同射の霊像ありと云三澤流彩持の本寺よりて常寺第二世の
七面堂 住持仙能院日宗より所二百日加行して此の傍に社殿を建立せしと云
日の丸旗曼茶羅 一幅
縦六尺五寸

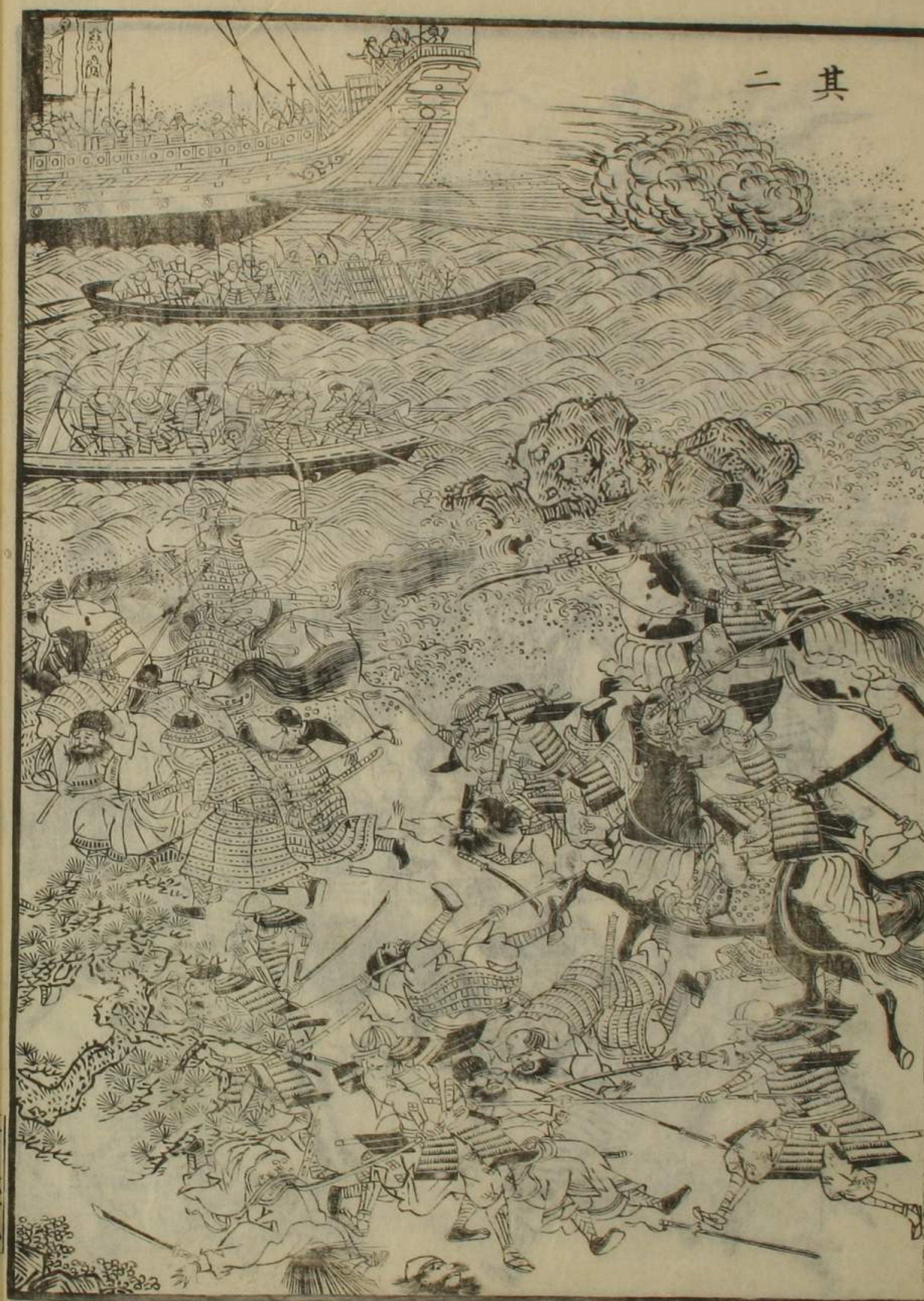
毎歳七月十六日
よりあれ二日
すて虫排とて
七面堂に掲て諸
人より参りて
月の丸の曼陀
羅ハ身延山に
あり



四尺五寸

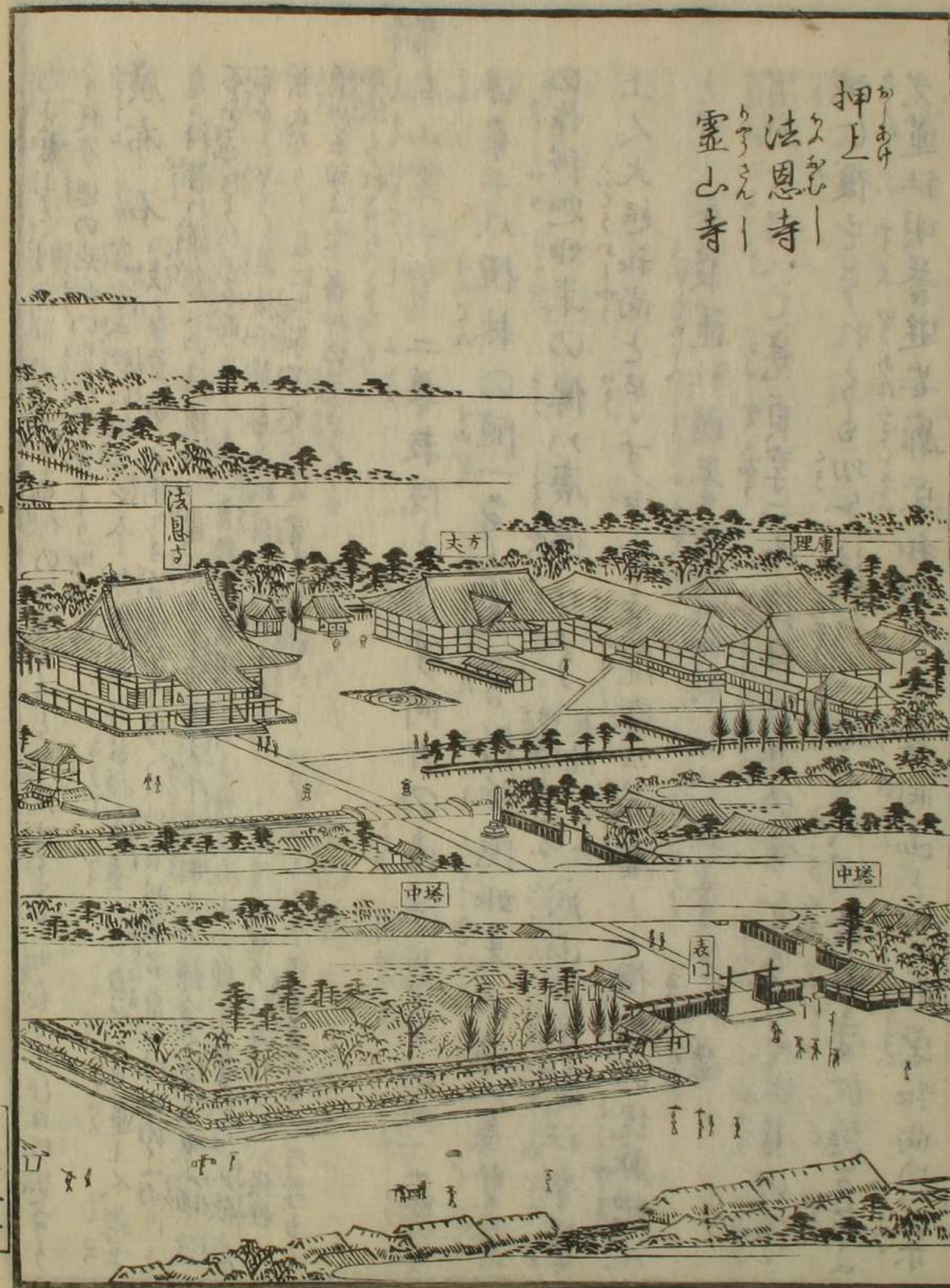
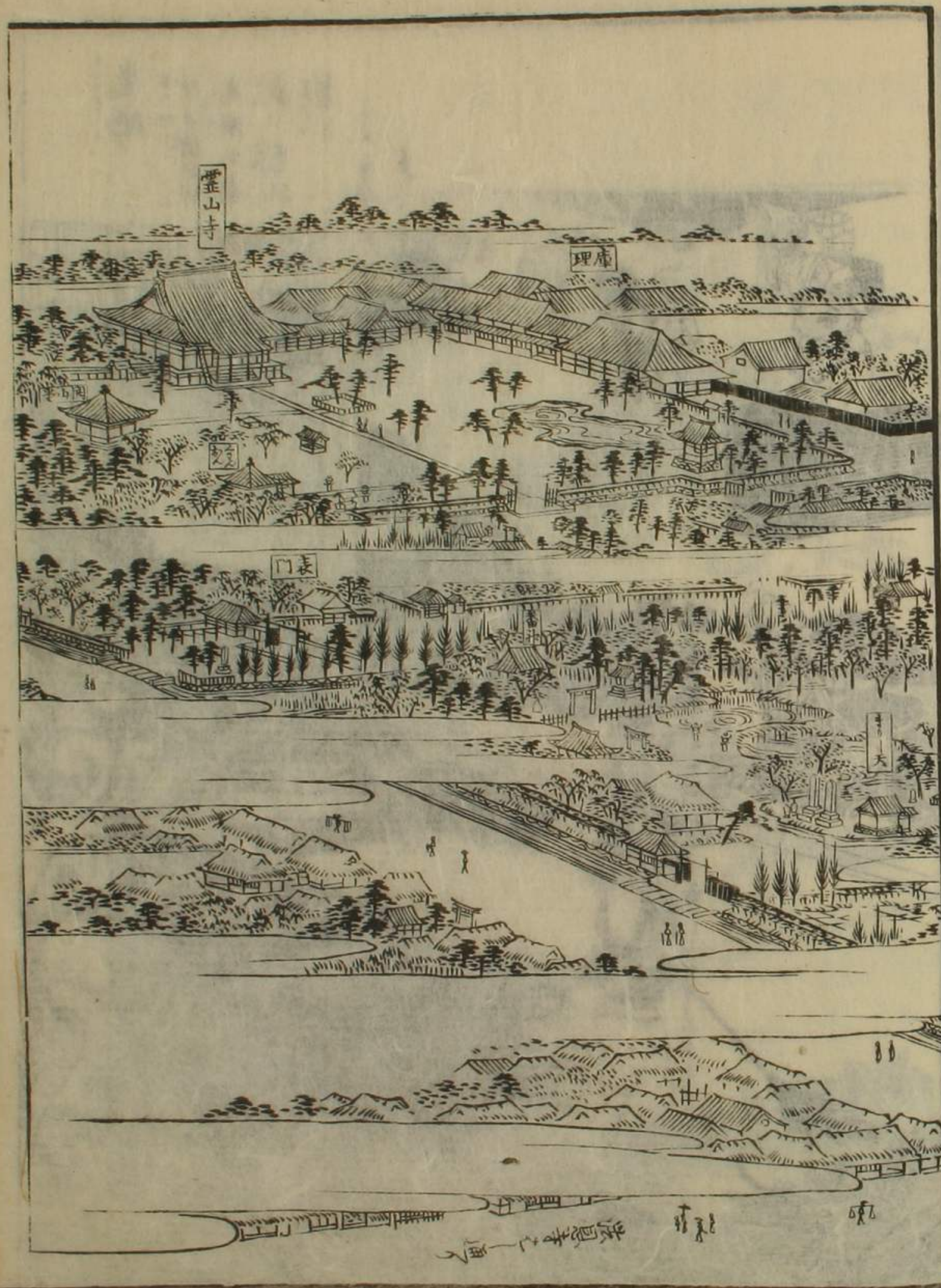
鎌倉將軍
 惟康親王
 蒙古夷賊
 退治の図





萬五等と赦して國に還るるは是此事に元主とあらん
なり蒙古の敗平還るるを得る者僅に此三人のみ
云えの世祖の至元十八年日本を撃つ兵十餘萬海島に死せし者を僅に二十人とする
を異称曰ふは二十人の十の字に符ありと云ふ史に十萬の兵還るるを略る者三人のこと
通修後資治通鑑綱目大學衍義補五倫書帝王編年集成太平記北条九代記當寺
縁起等の依凱陣の後勸賞として永く此旗を貞綱と綱と貞
綱末由を書きて身延山に納む然を當寺岡山日境上人等
延より推し来りて永く當寺の什宝ならしむとたり
寶聚山大法寺 同三丁より西より日蓮宗より同所法
恩寺に属し當寺は大永六年丙戌創立の梵宇なりて岡山
法恩寺第八世大権院日巧上人なり其頃の法恩寺と共
今の御廓内平川の地ありと後谷中に移され又元禄年
同今の地と轉りしむとたり
二十番神堂 本堂の左より番神の儀日巧上人の作なり日巧寺の
と病既に死せり又母悲しむるに二十番神の靈ありと良きを得て

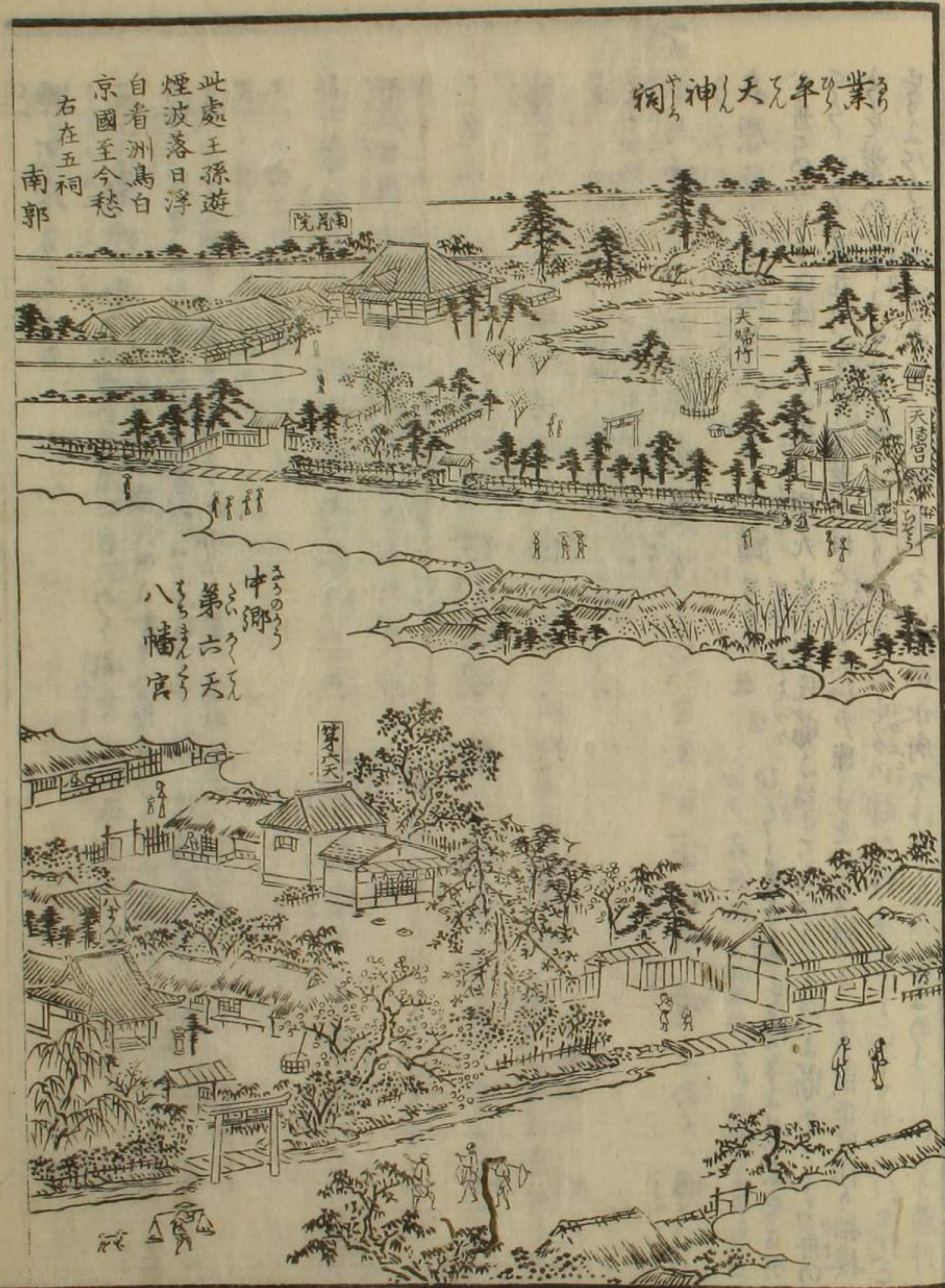
今蘇生と則廣布石を敬神の加護なりとて後其子をして
今蘇生と則廣布石の守れ當寺より
廣布石 當寺本堂に秘藏に今卵塔の中に其模を畫たり真物の日蓮上人親筆
龜戸村黄の藤倉の海道たり建長五年日蓮上人總綱より藤倉より日蓮上人の
布石と号し其後千葉の相傳りて千葉石とも稱せり茲に日巧上人の俗姓子
自此石面より二十番神の靈ありと云ふ
常在山靈山寺 二尊教院と号す同所の南法恩寺の北に隣る
淨寂十八檀林の隨一なり本寺阿弥陀如来の像の慈覺大師
の作釋迦如来の像の唐佛なり 此故に二尊 岡山に念蓮社専修
上人大起和尚と号す中古寺院既に荒廢し檀林の統脈絶ん
とてを最蓮社親善俊應和尚深く此事を慨屢
官府に詔して竟貞享二年檀林再興の命を蒙りて往昔の淨
域に復せられとも功を後住に譲て武別齋谷寺に隱る故に
光蓮社明善遊安廓栄和尚を中興岡山とて廓栄和尚一宗



押上
久松
法恩寺
霊山寺



の高德碩學よりて往生要集指麾抄を著し大にすゝ行の
 當寺昔の湯嶋妻恋坂ありし羽曆火災の後浅草に
 移りしより元禄年間今の地より移る
 知恩院尊空法親皇御廟
本堂の西よりあり空親皇は深川小名木川より
五本松より内用居あり其故の地よりくくく
 浄土傳燈系圖曰 尊空天蓮社帝譽号照満伏見
 守邦親王子入于靈巖室剝漆嗣法住洛知恩院元
 禄元年十一月七日寂
 觀音堂
本堂の南右の方にあり奉るの慈覺大師の作より
掛昌一位尼公の念持佛なりしと云
 平河山法恩寺 柳嶋土村町にあり日蓮宗よりて花洛本國寺
 の觸頭江戸之箇寺の一負なり本堂より定祖上人の像を安じ
 日法上人の作より相傳ふ當寺の太田大和守資高
資高は資高の戸谷中法恩寺
同悦寺の靈なりしと云
 先考六郎左衛門尉資康八道法恩寺
 十二回忌追悼の爲に田村の内を寄附し日住上人を同祖とせ
 則大永四年甲申武列江戸下平河は精舎を營建し一家の靈



此處王孫遊
 煙波落日浮
 自看洲島白
 京國至今愁
 右在五祠
 南郭

中郷
 第六天
 八幡宮

牌を居ると云云

三十番神堂 本堂の前左の方にある関東古戦場といふ所の云傍に三十番神の堂
に資高北条家とあり里見義弘より永く豊嶋郡の地を執行せんとす其の書
記より其の今の所城内
平河の地ありなり

當寺往古の今の御城内平河ありて本住院と号せしなり
所収役帳より往時寺は三田内所収分の地を
附せしなり刻を往時本住院の事を云ふなり
法思まを改し後世のものと
えたり遠く天正の後柳原の辺に移され其後谷中清水坂の
轉せしれ元禄の初今の地へひれたるなり
是乃ち平河より移るなり

業平天神社

中の郷南藏院といふ天台宗の寺境あり傳りか
在原業平朝臣の霊を鎮ると云云
の舟のありの浦より覆り爾迄は乃里民
とて其の在り所を今も業平村と云ふ又戸
とて此の一本より業平の霊と云ふなり
とて此の一本より業平の霊と云ふなり
とて此の一本より業平の霊と云ふなり

中郷八幡宮 同所南の方荒井町あり南番湯町天台宗泉
龍寺奉祀を相傳り文明七年乙未の鎮坐なりといふ

大六天祠 同北に隣り大川濱番賢寺別當なり當社も文明五年
癸巳の勧請なりと云傳り

多田藥師堂 同所大川濱にあり玉島山明星院東江寺と
号す天竺東叡
惣門は掲る所の玉島山の額に韓人雪月堂
李三錫の筆なり奉る藥師佛の像に惠心僧都の作なり
多田満仲公の念持佛なりといふ

相傳り村上帝御宇天徳二年撰別多田郷に一字の伽藍を



秋葉社の毎年
十月十六日
あつて賑へり
たのやく
多田薬師堂

中之郷
さうりー井

世の中

蝶々

とまれ

うくも

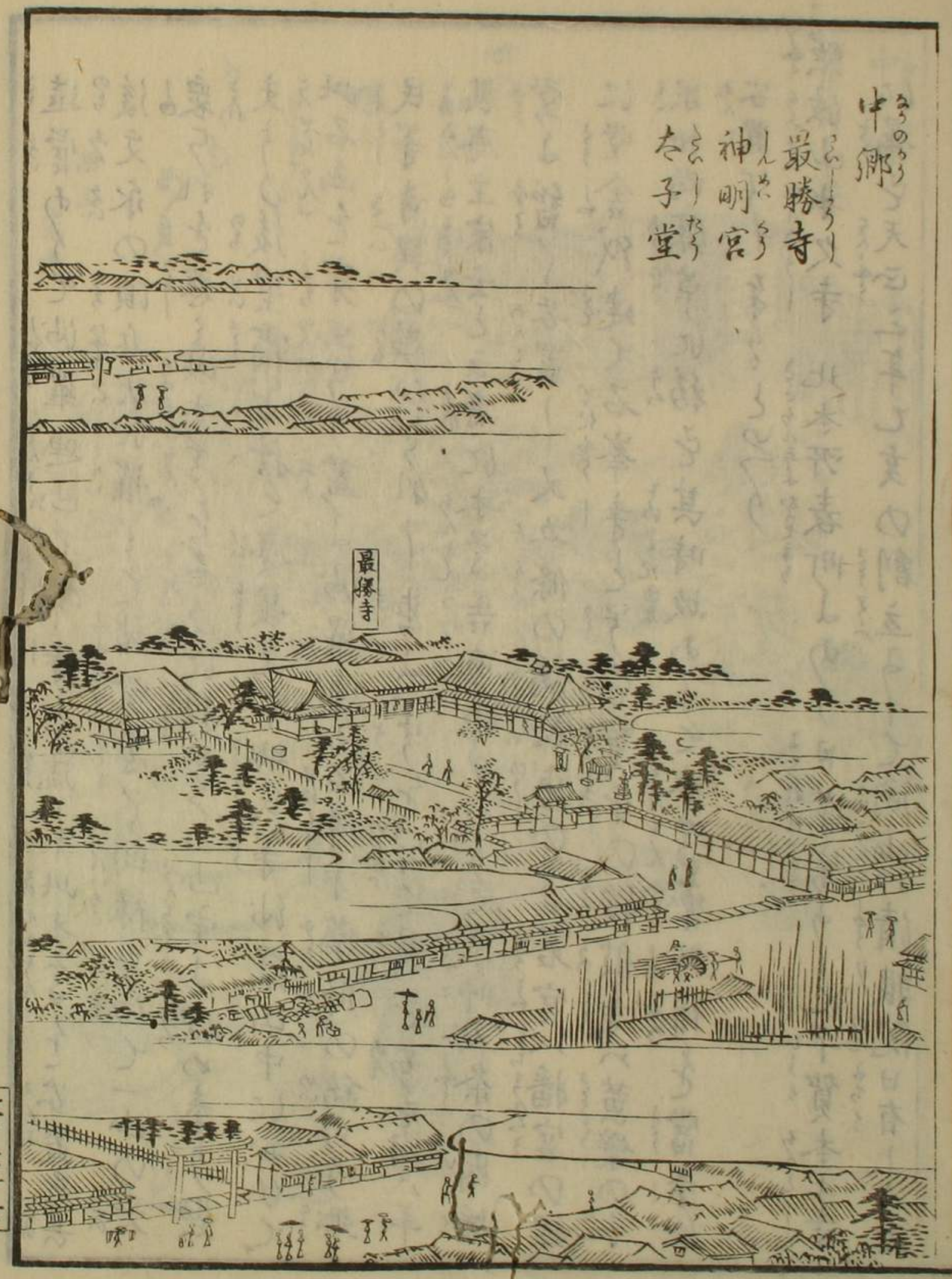
あま

西山
宗岡



造管ありて沙羅連山石峰寺と號し此本寺を安置せ其
後文永の頃兵火に罹りて諸堂悉く圯壊を依て一山の太
衆られを悲み此本寺を石函に収め山中に理め奉りぬ
夫より後星霜を移り慶長元年郷民等沙羅山中にひて
此石函を穿出り蓋は沙羅連山石峰寺藥師の銘あり郷
民等奇異の思ひをこれ一車一宇を管て是を安置同八年
其庵主宗玄と云者に本寺告めありて京師五條の因幡
堂に暫く安置し又五條の橋詰東の方若宮八幡宮の近
に堂舎代建て石峯寺と号を寶永の頃彼寺の黃檗の子
采和尚深草に移り其時故ありて本寺藥師佛を當寺に
安置せしとあるといふ

照法山本久寺 北本所表所あり日蓮宗ありて平賀本土寺
に属す天正三年乙亥の創立なりて岡山清眼院日有上人と



中郷
最勝寺
神明宮
左子堂

最勝寺

早を當寺に安置する所の宗祖大士の像は日朗所御首を彫刻
一 日法所全體と造り添られしといひ體中三寸に六寸の首
題の札を収めたり日朗のいひ日法等の真跡なりといひ
此御影始谷中感應寺に安置を元祿四年彼寺改宗の時
檀家より八牧弥宗と云ふ有信の人ありし此影像ありひに
之を天子大黒天等と其意よりつて宗教ありしを後當
寺に安置しありといひ境内安垂の七面大明神は花洛村雲の
尼御所隨龍寺殿仕女數馬女感得の靈像なりて故ありて當寺
に安垂しありといひ
正覺山妙源寺 同所北本所番場所にあり日蓮宗なりて下
野佐所妙顯寺は屬を建武年間草創し中老僧天目
上人開山たりといひ總門の額正覺山の二大字は平林淳信の
筆跡なりて消日居と記しあり

牛寶山最勝寺 明王院と号し同所表町にあり天台宗なりて
東叡山は屬を本寺不動明王の像は良辨僧都の作り當
寺は牛御前の別當寺なり貞觀二年庚辰慈覺大師草創
良本阿闍梨開山たり寛永年間 大樹 此近所遊獵
の頃屢當寺へ 入泅せられしより其頃の假の御殿杯
堂構りしと云ふなり
牛嶋神明宮 同所並に相傳ふ貞觀年間の座ありて別
當を神宮寺と稱して最勝寺なり兼帶に 壽永年間本所の郷民
元海と云ふ法師大徳大僧の文を唱へ我は土安徳天人の常
なりと云ふの人民は信じてありといふも其の縁は久しき事なり
伊勢の御社を勧誘しありといふも其の縁は久しき事なり
同所牛嶋の北条家の所領ありて戸牛島四村とありて壽永元年
より今も本所中の所領ありて戸牛島四村の古家に同向院の
太子堂 同所元町にあり天台宗如意輪寺に安置を本寺聖徳太子

の像ハ十六歳にありてその時自親造りありて當寺ハ傳和
天皇の嘉祥年間慈覺大師東國進化の頃の創建なりて帝百
畝の水田を寄附しありて天文の頃此地祝融氏の災にありて
とほも太子の靈像ハ自火燭を造りて出ありて恙なくあり
江戸名所記より

